

Newsletter for JADR

I. '97 Newsletter 第2報によせて

JADR会長 黒田 敬之

このNewsletterが、お手元に届く頃は、秋の学会シーズンに備え、ご準備に色々お忙しい時期かと拝察いたします。皆様のますますのご発展をお祈りいたします。

OrlandoのIADR General Sessionでは、Oral session, Poster session, Lunch & LearningあるいはSymposiumにと多くのJADRのメンバーのご活躍があり、Council Meetingでも、JADRのactivityは高く評価されておりました。Hatton AwardのCompetitionでは、今年も残念ながら惜しいところで受賞を逃したと、漏れ聞いております。発表に際して、研究上のhypothesisを明確にし、その検証にどのような研究計画をもってのぞんだか、という点に、examinerの方々が、かなりのweightをおいて質問されるとのことです。せっかくの素晴らしい研究成果が、発表の技術的な面でおくれをとるのは誠に残念なことと思われれます。是非そのような点に留意してCompetitionにのぞまれることをお勧めいたします。なお、JADRでも、このHatton Award CompetitionへのTravel Award受賞者5名の選抜方法を、今年から変更しまして、本部のCompetitionに対応し得るようなチェックポイントを設けていくことにいたしました。

今年のCouncil Meetingでの協議、報告の中で、とくに、私からご報告しておきたいことは、まず、Orlando以降、会長がUCSFのGreenspan先生からSwedenのPer Olof Glantz先生に、次期会長は作田先生に代わられたことです。副会長には、UCSFのSally Marshall先生がさきの選挙で選出され評議会です承されました。2003年のIADR General SessionはIsraelのJerusalemとSwedenのGoteborgが候補地でしたが、投票の結果、Jerusalemに決まりました。従来、3年に1度の北米以外の地での開催を、2001年の後は2年おきに決

めてみたばかりでしたが、開催費用の点から、やはり3年に1度の方がよいのではと言う意見が強く、もとのペースに戻ることにになりそうです。

7年間の長きに亘って、激務の事務局長を務められたJohn Clarkson先生がDublinのTrinity CollegeのPublic Dental Healthの教授としてacademic positionにつかれることは、IADR,AADRにとっては残念ですが、代わりにDenmark出身で、現在Hong Kong大学Public Health Dentistryの教授をされているEli Schwarz先生が、就任されることになりました。しかし、Schwarz先生のHong Kong大学での立場から、実質上の交代は、来年1月からのようです。2001年の日本でのGeneral Session開催にあたっては、いろいろとお世話いただくことになると思われます。幸い、大変親日家でいらっしゃると伺っておりますので、JADRとしてもClarkson先生同様、暖かいご助言を頂けることでしょう。

学会最後の夜には、Clarkson先生ご夫妻主催のパーティーが開かれました。数名のDivisionの代表者が、先生の事務局長としての業績を讃え、感謝のスピーチをしました。私も、AADRのBoyan先生の次の2番目に、DublinでのIADR時にIrish policemanの親切心に感激させられたことを話題として、Ireland出身のClarkson先生への饒別の言葉を述べました。パーティーはIrelandのgroupの人たちの歌で大いに盛り上がりを見せ、夜の更けゆくのを忘れるほどでした。

その他の詳細なCouncil Meetingの報告は、岡田先生がまとめてくださっている報告をご参照下さい。

さて、JADRにありましては、いよいよ、評議員制度のもと新会則で今年からスタートいたしましたわけですが、問題はまだ細部で詰めてはいけなことが沢山残されているようです。とくに、山田前会長からの申し送り事項の一つである役員選出規定の整備です。色々な不備事項を先生方のお知恵を拝借いたしまして任期中にはきちっとした形にしないとはならないと考えておりますので宜しくご指導下さい。それとともに、JADRのConstitutionとBylawsを、英訳して本部に報告しなくてはいけなくなりました。従って本部のConstitutionやBylaws

との間の整合性も、図る必要もあります。

それにつけても、IADRやAADR General Sessionへの先生方の参加の積極性に比べ、JADRへの参加の意欲との間に、かなりの格差が見られるように思われます。このことは、従来、本学会の発展に努力されてこられた先生方から、しばしば、伺ってきたことでしたが、今、私も実感として受けとめております。このままでは、いけないのではないかと、どうすれば、積極的に参加したいと考えていただけるような魅力ある学会に発展できるのでしょうか、思い悩むところです。一つには、JADRが、IADRの1地域部会であるため、独自の雑誌を発行していないことも影響しているように思えます。また、昨今、学会の数が多くなり、研究分野の細分化と内容の先端化に伴い、かつて、JADRがうたい文句にしていた、「本学会で発表することにより、基礎と臨床の色々な分野の先生方のご意見やご批判を伺える利点がある」と言う姿が必ずしも現状にそぐわず、中途半端な印象を持たれるようになってきているのも理由の一つかも知れません。それならば、どのような解決策が考えられるのでしょうか？ AADRについて2番目の1,700名を超す会員数を誇るJADRが、その年次大会には、500名前後、時には300名程度の参加者であり、発表演題数も、200題以下とIADRへの400題以上の演題数と比べて極端に少なくなっている現実を少しでも改善していきたいと考えています。学会のお世話をお引き受けいただいた先生方のご努力に報いる上でも何とか良い考えを集めたいものです。

2001年の千葉、幕張コンベンションセンターでのIADR General Sessionに関しましては、これまで、準備委員会が、JADRの理事会を基盤として組織され、本部との交渉に当たってきましたが、この委員会を発展的に改組いたしまして、いよいよ、IADRのLocal Organizing Committeeとして、今年度より、組織委員会を発足していただくことにいたしました。組織委員には、今期のJADR理事会からのご推薦をいただいた方々、日本歯科医師会、日本歯科医学会からのご推薦をいただいた方々12名ほどで構成していただき、企画、予算ならびに実行委員会の組織運営をお願いしていくことになります。この原稿を書いております時点ではまだ組織委員の方すべてが決まっておりませんので、別の機会にお知らせすることにいたします。組織委員長は組織委員の互選により決めていただきたいと存じております。準備にあたり問題は、外国からの参加者数を出来るだけ多くしたいこと、国内の会員外の先生方に、興味あるscience transfer programを用意して、臨時参加者数を増やしたいこと、supportいただける企業の確保、といったところが、大きなポイントであろうかと思われます。

思いつくままに雑感を述べさせていただきました。

(この原稿を執筆後、組織委員および組織委員長が決定いたしました。内容につきましては3ページをご参照下さい。)

II. 第45回 JADR 総会・学術大会のご案内

大会長 中村 亮 (徳島大・予防歯科)

- 日 時：1997年12月6日(土)～7日(日)
場 所：長井記念ホール(徳島大学蔵本キャンパス内)
徳島大学歯学部大講義室他
内 容：一般口演、特別講演、ポスターセッション、
フォーラム、商品展示、ランチョンセミナー他
特別講演：
- I. Prof. Denis Mayrand
GREB, Faculty of Dental Medicine
Laval University, Quebec, Canada
 - II. Prof. Dong-Seok Nahm
Seoul National University College of Dentistry
Seoul, Korea

会員の皆様にはすでにご案内申しあげましたように、第45回JADR総会・学術大会は上記のように四国の地、徳島に於いて1997年12月6日(土)、7日(日)の両日に開催いたします。私の記憶ではJADRが本州以外の地で開催されますのは、今回が初めてではないかと思えます。徳島は近畿圏のすぐ近くにありながら、自然がたっぷりそのまま残っており、人情豊かな土地柄で田舎としての良さが今も処処に見られます。

来春には明石大橋が開通しますので随分と賑やかになることが予想され、このような大都会では経験することができない大自然と情緒を味わっていただけるのは今年が最後になるのではないかと危惧されています。

大会の特別講演にはカナダのラバル大学歯学部メラン教授(Prof. Mayrand)に、成人性歯周炎の病原細菌と目されている*Porphyromonas gingivalis*の病原因子について講演していただくことになっています。また、恒例の相互交流協定によるIADR韓国部会からは副会長のナム教授(Prof. Nahm)をお招きしています。演題は未定ですがナム先生はソウル大学の矯正学の教授ですので、この分野の興味あるお話がお聞きできるものと期待しております。その他、提出演題の中からトピックス性のあるものを選びフォーラムを組む計画をしております。

今回、総会・学術大会が開催されます徳島大学・蔵本キャンパスは、徳島市を東西に横たわっております眉のような形をした山、眉山(びざん)の西北に位置する緑に恵まれた所です。徳島は、四国三郎と呼ばれる吉野川をはじめとして、市内各地に水に親しめる河川を持っており、水の豊かな温暖な土地柄です。

この水と緑に恵まれた徳島の地で、皆様方には大いにリフ

レッシュして頂き、昼間は学会会場で興味ある研究について活発な討論や情報交換をし、夜には新鮮な海の幸、山の幸を取り囲んでさらに交流を深めて頂けたら幸いです。また、時間のあ
る方には是非、大鳴門橋、祖谷のかずら橋、大歩危・小歩危、うだつの町並み、四国八十八カ所の札所巡りなどに行かれることをお勧めします。もちろん、時間のない方も懇親会に参加されると、徳島名物“阿波踊り”が体験していただけるよう計画しておりますのでご安心下さい。

“踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らなそんそん”という歌詞に倣い、徳島でのJADR総会・学術大会に、より多くの方が積極的に参加されますよう、お待ちいたしております。

なお、発表演題の申し込みと事前登録の締め切り日は8月29日(金)となっております。この日までにこのNewsletterが皆様のお手元に届くかどうか自信がありませんが、一応念のため申し添えます。

III. JADR 理事会報告

JADR 事務局長 岡田 宏

1) 評議員の承認について

JADRが多岐にわたる歯科医学の総合的国際会議であるIADRの日本部会としてその役割を果たし、大学や研究機関等に所属される先生方に対して開かれた学術団体としてさらに発展してゆくべく、会則を一新し、昨年の総会で承認をいただいた。この目標を達成する一助として、新会則において新しく評議員制度を導入することとなった。歯科大学・歯学部で各1名ご推薦いただいた先生方に加え、医科大学、歯科口腔外科系ならびに歯科医学研究所関係の2名の先生方を理事会に評議員候補者として推薦し御承認いただいた。委嘱状を送付させていただき、全評議員の先生方から承諾をいただいた。評議員の氏名一覧は本Newsletterの末尾に掲載させていただいている。今後、JADR理事会並びに事務局と一般会員との橋渡し役としてのみならず、JADRが歯科医学の横断的な学術団体として更なる発展を遂げられるようご協力をお願いしたい。尚、評議員会は年1回、学術大会開催中に行うことになる。

2) 斎藤 毅理事の理事辞退ならびに後任理事の選出

斎藤 毅理事(日大・歯科保存第2)が日本歯科医学会会長に就任されたため、JADRの理事としての活動を全うすることが困難であるとの理由でJADR理事を辞任したいとの申し出があり、理事会はこれを承認した。尚、後任として中林宣男先生(医歯大・歯・医用器材研)を理事として推薦、承認され、ご本人からの承諾もいただいた。

3) 第46回JADR学術大会

第46回JADR学術大会は高江洲 義矩先生(東歯大・衛

生)大会会長の下、開催されることとなった。詳細は次号のNewsletterで報告したいと考えている。

4) Hatton Award 応募候補者の審査基準見直しについて

前回の第75回IADR大会よりJADRから5名のHatton Award 応募候補者が本選にエントリーできることとなったが、候補者選出をより公正に行うため、審査基準につき検討を行った。その結果、(1)指導教官は自分が指導する候補者の選考委員になれない、(2)本選の採点方法に準じ、目的・方法・結果・結論を分けて評価する、(3)応募内容に関して研究の背景・今後の展開および発展性・Dental Scienceへの貢献につき応募者自からの説明文の提出を求めることとした。また、指導教官が複数候補者を推薦することは避けていただくよう、また、同一講座から複数候補者を出す場合には指導教官が重複しないようにしていただくようお願いすることとした。また、既に過去において同候補者となった方は本賞の趣旨から再応募をご遠慮いただく方が好ましいという意見が提出された。

5) 2001年第79回IADR総会(幕張、千葉)の準備

前回のNewsletterでもご報告させていただいたが、21世紀の幕開けにふさわしい国際的、学際的視点に立ったIADRの開催を目指し、準備委員会が設置されIADRの本部との折衝が行われてきたが、本年度よりIADRのLocal Organizing Committeeとして組織委員会を発足することとなった。

IV. 第79回IADR総会組織委員会の発足

今年度より、2001年千葉、幕張で開催される第79回IADR総会の準備委員会を発展的に改組し、組織委員会を発足することとなり、以下の先生方が組織委員ならびに組織委員長として選出され、8月4日の理事会で承認された。尚、組織委員長は組織委員の互選により選出された。本組織委員会はIADRのLocal Organizing Committeeとしての位置づけであり、IADR本部とも緊密な連絡を取りながら同総会の準備を進めることになる。

組織委員会委員

委員長：黒田 敬之 東京医科歯科大学歯学部歯科矯正学第2講座

委員：藍 稔 東京医科歯科大学歯学部歯科補綴学第1講座(日本歯科医学会副会長)

梅田 昭夫 社団法人日本歯科医師会副会長

大谷 啓一 東京医科歯科大学歯学部歯科薬理学講座

岡田 宏 大阪大学歯学部口腔治療学講座

奥田 克爾 東京歯科大学微生物学講座

川添 堯彬 大阪歯科大学歯科補綴学第2講座

小林 義典 日本歯科大学歯科補綴学第1講座

佐々木一高 クインテッセンス出版株式会社
 須田 英明 東京医科歯科大学歯学部歯科保存学
 第3講座
 中村 亮 徳島大学歯学部予防歯科学講座
 茂呂 周 日本大学歯学部病理学講座

V. 第75回 IADR in Orlando の報告

A. IADR 評議会の報告

JADR 事務局長 岡田 宏

第75回 IADR 学術大会前日 (1997. 3. 18) 9:00より昼食をはさんで16:30迄開催された。JADRを代表して黒田会長、中村副会長、岡田事務局長が、またオブザーバーとして山田前会長が出席した。会議の内容については、本年度第2回理事会 (4月21日開催) において黒田会長より詳細に報告された。またその内容の要旨については IADR Council Highlights として IADReports 19巻1号に既に記載され、会員の先生方の手許に届いていることでもあり、ここでは若干従来とは趣を変えて以下報告する。

IADRの地域別、国別組織は会員数に応じて Division と Section に分れており、アメリカ、日本、カナダ等が国別 Division を、北欧 (スカンジナビア)、ヨーロッパ大陸、東南アジア等が地域別の Division を形成している。今回ロシアが Section として加盟が認められ、正式メンバーとなった。東欧はヨーロッパ大陸 (Continental European Division) に所属している。中国は IADReports 19巻1号の12ページに記載されているように IADR との交流が活発化している。中国の経済事情もあり、某企業が肩代りして30人分の IADR 年会費と30校に J. Dent. Res (JDR) の配布が現在行われている。

IADRの学術雑誌である JDR は昨年 Scientific Impact Factor (SIF) が 3.810 と歯科関連の国際雑誌で最高値を示した。現在論文投稿は月平均30数編に及び、内訳は臨床研究38%、材料科学29%、生物学34%で、投稿者は北米外からが43%にもなっている。査読者も40%以上が北米外の研究者で、採択率は努力しているが25-30%の状況である。JDRの印刷等にかかる経費が講読料に見合わず、講読料の値上げが提案された。現行の \$55 から \$70 に1998年から上がるであろう。但し、ページチャージは据え置くこととなった。また、各 Division の学術大会の abstracts が現在 JDR に JDR の予算でもって無償で掲載されているが、その費用が \$32,000 とかかりすぎるので、経費削減の対策が練られている。以上の件から学術雑誌を守り育成するためにも会員の皆様の購読をぜひお願いしたいとの依頼があった (IADReports 19巻1号19頁にも依頼文が掲載されている)。IADR では JDR 以外に Adv. in Dental Res.

(これは IADReports 19巻1号19頁にもあるように学術研究会の Proceeding が特集されることが多い)、Crit. Rev. in Oral Biol. & Med. さらに Special Care in Dentistry が編集されている。J. Oral Implantology は IADR での発行を中止した。編集関連経費の増大のため、IADReports もこれまでの5回から3回 (4・5月号、6・7月号、9・10月号) として残る1回 (11・12月号) は IADR Home Page に掲載することになった [発行は都合4回]。

Nice における IADR General Session 事前登録費は \$195 から \$230 へ値上げされた。とりわけ北米外での開催には経費がかかるので、2001年の幕張 (千葉)、2003年の Jerusalem (Israel) の開催後は従来のルール通り3年に1回の頻度で北米以外の地で学会を開催することになった。ちなみに2004年は New Orleans, Atlanta か Baltimore が、2005年は Hawaii などが候補地にあげられている。

参考までに今後の開催予定は (アンダーラインのないのは AADR と CADR の共催学会、アンダーラインのあるのは IADR 総会を示す)、

1998年 Mineapolis (March 4-8), Nice (June 24-27)
 1999年 Vancouver (March 10-14)
 2000年 Washington, D.C. (April 5-9)
 2001年 Chicago (March 7-11), Makuhari (June 27-30)
 2002年 San Diego (March 6-10)
 2003年 Jerusalem (Israel 日程未定)

である。

しかし IADR 運営経費が上昇し、将来、会員の年会費の増額も考慮しなければならなくなるかも知れない。しかし当面は資産の運用で切り抜けたいとのこと。新財務担当理事には John Stamm 博士 (UNC. at Chapel Hill, 歯学部長) が指名された。また、組織運営、経理の合理化をはかるため、IADR Strategic Plan を検討する Task Force や AADR と IADR の Joint Task Force が設けられた。

評議員割り振り定数については従来から検討され、昨年 (サンフランシスコ) での評議会で会員が2,000名以上の Division に1名増員することが了承された (新たに AADR には1名の評議員が増員されることになる) が、その為会則の改正が必要で今年の評議会で新会則が承認された。その際、他の部分も修正され、例えば IADR への入会手続として従来に加えて、本人の居住する地域の Division へまず入会し、その年会費を支払わなければならないとの文言を明記することとなった (そこで今後、会員登録に関する情報を JADR も IADR 本部とより密接に交換し合うこととなろう)。

1997年度版会員名簿が出来上がり (経費 \$59,990)、無料で会員に配布された。尚、Research Group の所属は記載されていないが、研究グループによってはその名簿の把握が上手くいっていないとも聞き及んでおり、次回 IADR 年会費払い込み時に各自でチェックされることをお勧めしたい。何故なら会員の新しいデータベースを構築 (今夏までに) し、Home Page

や電子メールなどによる会員へのサービス向上が目論みられ、十分なサービスを受けるためにも正しいデータベース作りが不可欠だからです。

次期副会長に Sally Marshall 博士 (UCSF, 修復学講座) が会員の選挙で当選された。投票率が18%と大変低かったので、事務局長より、もっと関心を持ってほしいとの要請があった。次年度の副会長選挙は次の3氏: Graham Embery (U. of Cardiff, Wales), Majorie Jeffcoat (U. Alabama), Maria Fidela de Lima Navarro (U. Sao Paulo, Brazil) が候補者として争われる (今回の選挙は IADR が日本で2001年に開催される時の会長の選出にあたるので、皆様に関心を持って投票していただければと思っています)。

学問の学際的发展や IADR の体質強化もあり、IADR Institutional Section が設けられ、日本からも GC, Lion, Morita の3企業が創立会員として参加された。GC は Toshio Nakao Fellowship 賞 (IADReports 19巻1号20頁) を設定し、Material Science の賞励に尽力されている。

各 Division, Section および Research Group の昨年度の活動報告があり、JADR については黒田会長から2001年 IADR 総会 (幕張) についての準備状況も併せて報告された (写真)。尚、Continental European Division では European Journal of Oral Science という学術雑誌を発刊するとの報告があった。

新しい事務局長に Eli Schwarz 博士 (香港大学) が選考された (IADReports 19巻1号7頁)。最後に JADR 会員で IADR の各種委員会でご活躍の先生方のお名前 (敬称略) を列挙して報告を終わりたい。

IADR 次期会長: 作田 守 (阪大名誉教授)

Constitution: 川添堯彬 (大歯大教授)

Ethics: 大浦 清 (大歯大教授)

IADR / AADR Joint Exhibit: 柳澤孝彰 (東歯大教授)

ICOB: 恵比須繁之 (阪大教授)

Membership & Recruitment: 小林義典 (日歯大教授)

Nominating: 栗栖浩二郎 (阪大教授)

Young Investigator Award: 中林宣男 (医歯大教授)

Fellowship: 須田英明 (医歯大教授)

この他 JDR の Publication 委員として、村山洋二 (岡大教授) が活躍されている。



「評議会における JADR 活動報告」

(写真は阪大・岡田教授の提供による)

B. IADR Strategic Plan について

IADR 次期会長 作田 守

IADR には、通常の学会活動に加えて、学会の更なる発展を期して作られた Strategic Plan がある。これは、Executive Director の John Clarkson が中心となり、理事会、評議会の議を経て1994年3月に作られ、実行に移されたものである。以来3年が経過するので、現在4名の Task Force のメンバーがその実績を評価しつつある。ここではこの間どのようなことが行われてきたか、その進捗状況をコメントとしてご紹介したいと思う。

Mission I. To advance research and increase knowledge for the improvement of oral health worldwide.

Strategic Objective #1. Through the Divisions and Sections, establish and support programs to promote oral health research and IADR activities. Regions with less developed research programs will be identified for specific support.

- a. A request for proposals for programs or projects to be supported by IADR to achieve these objectives was issued to the Divisions and Sections in 1996.
- b. Grants to the Divisions and Sections for selected special projects and infrastructure development may be provided in response to requests.

コメント: IADR 総会を開催したときの余剰金の10%を途上国の歯学研究の支援に割くことが理事会、1996年3月の評議会 (San Francisco) で承認された。1996年中に Division/Section から Request for Proposal (RFP) が5件寄せられたが、その内3件が趣旨に合うとして1997年中に実施されることになった。総額は \$28,500 である。内容は、Argentine Division から提案された南および中央アメリカ地域の歯学研究に関する英文雑誌発行の支援 (\$5,500)、Australian & New Zealand Division から提案されたベトナムの歯学研究者数名の Southeast Asian Division の学会 (Thailand の Phuket で9月に行われる) への旅費の支援 (\$8,000)、South African Division から提案された Tanzania, Kenya, Uganda での研究方法に関するワークショップの開催と今後の歯学研究の推進を期待しての支援 (\$15,000) などである。RFP は各部会 (Division) から1つの提案をすることが出来るので今年も IADR の Central Office では11月1日までに各部会を通じて寄せられることを期待している。

註: IADR では、学会員の年会費はもとより毎年開催される総会の登録費も本部で集められる事になっている。総会開催後に生じた余剰金の20%は総会を開催した Division に配分される。残りは年会費やその他の収入と共に学会の様々な運営費に充てられる。年会費は全収入の15%程度しか占めないで、総会開催により余剰金を産むよう努力することが総会を担当す

る Division の大きな役割である。

- c. The IADR Visiting Lecture Program will be developed and conducted each year.

コメント：最初の Visiting Lecture Program が Indonesia と Sri Lanka を対象に計画されたが、ゆっくりとした進捗状況である。1995年7月に Indonesia で1日のコースが開催された。3年間のプログラムが Sri Lanka で1997年1月にはじまった。一方、Hungary と Poland でのプログラムは Central European Division の協力で計画されたが、実施するにいたらず、Visiting Lecture Program について全体的に検討がなされている。

- d. IADR Fellowships will be provided to enhance professional development.

コメント：Fellowship Committee は常置委員会となった。各研究グループによるフェローシップ増設の全体像について、フェローシップ委員会からの提言が求められている。

- e. Long-term agreements for corporate sponsorship of selected IADR activities will be developed in 1996-97.

コメント：IADR の会則にある Institutional Membership はこれまで存在しなかったが、今年の Orlando での総会時に Section として形成され、会則により Institutional Section を代表する councilor が評議会に出席することも理事会、評議会で確認された。1997年3月の時点で13社が参加した。日本からは GC, LION, MORITA (アルファベット順) の3社が創設会員として参加された。IADR と共に今後の本 Section の発展が期待される。この会員は今後さらに増えるであろう。

Strategic Objective #2. Expand and further develop the Association's partnership with international associations, industry, health agencies, and scientific and educational professional organizations.

- a. Develop strategies with other organizations to inform governments and the general public about the importance of oral health research and the relationship of oral health.
- b. Initiate discussions through the Executive Directors and the International Dental Leadership Forum to develop cooperative ventures with selected associations, *i.e.*, FDI, WHO, the International Federation of Dental Education Associations (IFDEA), and industry. The Board and Council may wish to push forward with specific ventures with FDI.

コメント：これは WHO, FDI, IFDEA など他の組織との協

力関係を保って歯学研究の発展を期待しようとするものである。IADR の役員が FDI と1996年3月に London で会い協力事業について懇談した。IADR と WHO は協力して2年間仕事をすることが同意され(更新される), non-governmental status としての関係が1997年2月に WHO で承認された。IFDEA は、IADR 総会と隣接して IFDEA の会議を行うことに同意し、IADR の評議会には IFDEA の代表がオブザーバーとして参加することを評議会で承諾した。

Mission II. To support and represent the oral health research community.

Strategic Objective #1. The current structure and functions of the IADR will be examined and modified with the goal of enhancing membership recruitment and participation, and the organization's ability to implement the Strategic Plan.

- a. The IADR Membership Committee will be charged to present, within one year, a plan to increase IADR membership and services.

コメント：会員増強の方策を Membership Committee の委員長と検討中である。Russia が Section として加わることで Orlando での評議会で認められた。China から歯学研究者の参加が期待されている。また、IADR 会員としての会費を支払うことが困難な経済状況にある国の人々に対しては adopt-a-member campaign が繰り広げられている。

註：年会費納入の際に申し込みが出来るようになっていて、会員のご理解とご協力をお願いしたい(\$40)。

- b. An *ad hoc* task force was established in 1994 to examine the current organizational structure and functions of the Association to ensure greater representation and participation of the membership and the achievement of the Goals of the Strategic Plan.

コメント：IADR の Structure & Organization が Task Force で検討され、1995年の評議会 (Singapore) で報告された。その後、理事会、評議会で様々な点が検討されたが、その中で2,000名を超える会員を擁する Division の評議員数を1名増やして4名とすることが Orlando での評議会で承認された。

Strategic Objective #2. Develop the IADR Headquarters as a central facility for improved communications with Divisions, Sections, Groups, and the membership.

- a. Charge the *ad hoc* Joint Technology and Communications Committee to report within one year on all aspects of enhancing communications within the Association.

- b. Advanced communications technology for improving services between the Central Office and the membership will be introduced.

コメント：Joint Technology and Communications Committeeは常置委員会になった。IADRのHome Page (<http://www.iadr.com/>)にInternetを通じてリンクすることにより publication, abstracts, newsletters, meeting information (on-line registrationを含む)などがCentral Officeから得られるようになった。理事およびスタッフは、最新の通信技術および電子出版技術の導入に常に努力する。

Mission III. To facilitate the communication and application of research findings.

Strategic Objective #1. Ensure that the IADR provides the appropriate avenues for the presentation of current knowledge on oral health research.

- a. An international task force will be established to report, within one year, on the quality, scope, structure of and member participation in all IADR meetings.

コメント：1995年の評議会（Singapore）でTask Forceからの報告があった。総会については大きな変化を求めているが、理事およびAnnual Session Committeeは上記の方向で具体策を検討しつつある。

- b. Fifteen additional travel fellowships will be established for young researchers to attend annual scientific meetings.

コメント：どのような形のfellowshipが適切かが常置委員会のFellowship Committeeで検討されつつある。

- c. Promote and assist in the development of regional scientific meetings and conferences, such as the ICOB, consensus conferences, scientific group conferences, etc.

コメント：World Conference on Preventive Dentistry (WCPD)が1997年10月にSouth AfricaのCape Townで開催され、International Conference on Oral Biology(ICOB)がItalyのBavenoで1998年6月に開催される。中国の上海ではRegional Scientific Meetingが1997年2月に行われた。

- d. IADR will actively promote the *Journal of Dental Research* and assist in implementing its Strategic Plan.

コメント：*Journal of Dental Research*の掲載論文数と発行号数の増大に伴い、予算がかなり厳しくなっている。よって、その対策が必須となっている。論文投稿者の負担を増やさず、購読料を値上げすることが考えられており、1998年から値

上げされることになろう（IADR会員は\$55から\$70に、AADR会員は\$48から\$70に）。

註：AADR会員およびCADR会員は*Journal of Dental Research*を必須購読することになっているが、その他の国では希望者購読になっている。IADR会員の非購読者は出来るだけ多く購読会員になって頂きたい。IADR会費納入時に申し込むと便利。IADRが出版している*Advances in Dental Research*や*Critical Reviews in Oral Biology & Medicine*などの雑誌についても購読者の増加を期待している。

Strategic Objective #2. Initiate additional science transfer programs.

- a. Develop and extend the current science transfer programs in cooperation with educational and practitioner associations.
- b. Obtain support for the addition of a science writer /journalist to the Central Office staff to improve science transfer communications in 1995.
- c. Develop new mechanisms to communicate the results of research presented at the IADR Annual Session.

コメント：IADR総会時にScientific Frontiers in Clinical Dentistryの会が開かれ、中国、東南アジア、東欧におけるscience transferについて話し合われた。

- d. Develop and disseminate policy statements and position papers in a timely manner on issues of concern to the scientific community, the media, and the public.
- e. Provide relevant information on oral health research to members, governments, international agencies, the media, and the public.

コメント：IADRはDivisionやSectionを通じて上記の情報を提供することによりDivisionやSectionを支持するべきである。ここに述べた内容も日本部会にとって何か役に立つ所があれば幸いである。（1997年7月）



会長招宴 Board of Directorsが紹介されている。
（写真は阪大・岡田教授の提供による）

C. 各 Research Group の活動報告

1. Behavioral sciences/Health services research group 坂本征三郎 (東北大・歯・予防)

IADR 国際大会で本来の予防歯科学, 歯科公衆衛生学に直接関係した部門は, Behavioral Sciences/Health Services Research であり, 他の Session 同様, 多数の Symposia, Oral Sessions, Poster Presentations があって, 活発な Discussion が展開された。この分野にしばった学会としては, AAPHD (アメリカ歯科公衆衛生学会) が毎年秋に開催されており, 前回はたまたま同じ Orlando で, 今回の参加者も同じ顔ぶれという感じだった。Seq#:32, #:125, #:192 が中心で, 筆者が特に興味を持ったのは, 小児の口腔保健状態を決める要因分析で, 低所得階層, アメリカ原住民, マイノリティの子供達の私のおよび公的歯科診療所での受療状況を調査し, 親の教育程度, 職業, 収入等, 即ち SES (Socio-Economic Status) との相関, 子供の食餌習慣, 就学状態との相関, さらに, その地域での水道水フッ素化の程度でそれらの要因がどのように修飾されるかを調べた報告もあった。総じて, 恵まれない人口画分での口腔保健を直視し, どの様に改善したらよいか真剣に取り組んだ研究が多かったのには感銘せざるを得なかった。公衆衛生レベルで予防を実践して住民の口腔保健の平均点をあげる一方で, 社会的により恵まれないグループについては, ケース・バイ・ケースで最も適した保健指導の方法を考案し提言するという報告が多かった。研究者の良心, 社会奉仕の精神が漲っており, 座って聞いていても日本での学会では経験できない心温まる思いがした。

2. Craniofacial group

黒田 敬之 (医歯大・歯・矯正)

1997年度のCFBGのbusiness meetingは3月20日の午後5時から6時まで, PresidentであるDr. K.Dryland-Vig (Ohio State Univ.)の司会で行われた。参加者は53名であった。

まず始めに, Univ. FloridaのDr. Stephen Keelingの逝去に対して黙禱が捧げられた。

ついで, 本年度の演題について, 270題の応募があったが, 他のgroupへの発表変更や不十分な抄録のため不採用になったものもあり, 217題が発表されたという報告があった。Hatton Award Competitionに参加した中にもCFBGに属するものも見られ実質的には220題になっているようであった。また, Lunch & Learningに1題, Behavioral groupとのjoint symposiumが1題組まれていた。これら多くの応募演題のreviewは現在は3人で行っているが, molecular biologyからgrowth evaluationなどカバーする範囲もひろがってきているために, reviewerを5人に増員することをIADR本部に申し入れることとなった。

本年度のCraniofacial Research Awardは, Minnesota

大学の名誉教授であるRobert Gorlin博士に贈られた。

昨年設置されたThe Sarnat Award (当該年度のunder-graduateおよびgraduate studentの発表の中で最も優れていたものへのAward)の受賞者は, 今回は7人対象者の中からcommitteeで選考しgroup newsletterで報告することとなった。

2期に互ってSecretary-Treasurerをつとめていただいた, Dr. Geoff Sperberに代わってBaylor Univ.のDr. Paul Dechowが引き受けていただけのこととなった。

Presidentには, Univ. WashingtonのDr. Sue Herringが就任した。

1998年度の学会では, symposium, workshop, lunch & learning等企画される予定である。

Dr. DechowからCFBGでもE-mailによる発信を活用したいので, 各メンバーのE-mail addressをDr. Dechow (pdechow@tambcd.edu)宛お知らせいただきたい旨, 依頼があった。

CFBGの学会発表を見ると, 年々, 臨床的な研究から分子生物学, 遺伝子レベルの極めて先端的な研究まで大変幅の広い分野に互ってきていることにまず驚かされる。review committeeが悩まされたというのも十分にうなずける。従って, 聞いている人もまったく違う集団の様相を呈し, 臨床的研究を中心に研究している人々は, Dental material groupやMaxillo-facial surgery groupあるいはNeuroscience-TMJ groupの発表を渡り歩くことになるし, molecularやgene levelの研究に関心のある人々は, mineralized tissue groupの会場とのかげもちといった傾向がはっきりしてきたように思えた。具体的に発表内容を種別してみると矯正治療に主として関連する形態的, 生理学的な研究, すなわち, 顎運動, 咀嚼筋の活動, 呼吸機能, 嚥下機能, 顎顔面頭蓋の成長発育, 治療のメカニクス, その評価など従来からCFBGの発表に多く見られたものからfibroblast, chondroblast, osteoblastの機能を細胞レベルで分子生物学的に研究したもの, 発生生物学や先天異常の遺伝子発現に関連した研究等に分かれている。今後は益々基礎的な先端的研究が増えていくように思える。しかし, 一方では, symposiumにみられるように, 他のgroupとのjointによる包括的な視点をもつ研究が大いに期待されているのもCFBGの今後の研究の方向性でもあることも確かなことと言える。ちなみに今年, Behavioral Sciences/HSRとのjoint symposiumがもたれ, oral cleftに関してepidemiology, psychosocial aspect, genetic aspectおよび, これからの研究の方向等が発表された。

3. Dental materials group

佐野 英彦 (医歯大・歯・保存)

今回のIADRでは先ず悲しい知らせがDental materials groupのメンバーに知らされました。State University of New

York at Storny BrookのJohn Gwinnett先生がIADRが開催される直前の日曜日(3/16/97)に心疾患で61才という若さで急逝されました。DMGのみならず歯科界にとっても大きな損失であります。先生のご冥福を祈って各セッションの始まる前に会場で黙禱が行われました。Gwinnett先生は古くはエナメル接着の研究が有名で、近年では象牙質接着に関する total etchingの後の moist bondingという考えを推奨することで再び研究の最前線に登場しました。近年のIADRのセッションでは先生の太く張りのある声で質問を受けた日本人の研究者も多数います。Gwinnett先生の講演は大変好評で世界の隅々まで講演旅行をされていました。また、先生は日本人研究者の仕事も良くご存じで、日本人の仕事の世界を紹介していただける数少ない外国人研究者の一人でした。まことに残念なことです。

さて、今回のIADRにおいてもDental Materialsセッションとして登録された演題数は823題と多くさらにJADR会員の発表数も数多く見られました。このように演題数が極めて多いため、興味のある演題が3会場で行われるといったことが度々あり、外国人研究者からもプログラムの組みかたに対する苦情が出ていました。この点に関して次回からの改善を期待したいと思います。今回も各会場は満員で、立ち見のみならず会場の外から演題を聞かなければならないようなセッションが多かったようです。日本人研究者の発表は評判が良く活発な質疑応答が行われていました。

今回のIADRでもレジンに関する発表が盛況で、そのなかでも接着に関する発表が興味を持たれていたようでした。また、Pulp biology groupとDental materials groupのジョイント・シンポジウムが開催されました。このシンポジウムではAlabama大学のCox先生とFloridaのStanley先生を中心としてレジンをういたdirect pulp cappingに関しての活発な討論が行われていました。このほかにも、理工学に関する基礎研究から臨床応用にかかわる研究まで幅広い分野にわたる発表が多数あり、興味の尽きない学会でした。

4. Geriatric oral research group

平野 滋三 (医歯大・歯・高齢者歯科)

1997年のIADR MeetingにおけるGeriatric Oral Researchの発表はポスターセッション33題、オーラルセッション20題を数え、昨年と同じ規模で開催された。ポスターセッションのトピックはInstitutionalization and Oral Health Perceptions, EpidemiologyそしてGeneral、口演発表のテーマはEpidemiology, Salivary Factors, Clinical, Quality of Life and Perceptionsであった。従来どおり、老人養護施設における実態調査、疫学調査が数多く報告された。そのトピックはカリエス、歯周病、全身疾患と口腔内状況の関わり、口腔乾燥症、薬物と唾液の分泌量の関係等であった。唾液に関する研究は以前と比べると特定の疾患、障害との関係を報告したものが

多く、とくにガン患者における唾液分泌状態の実態、引き続き行われる放射線治療の影響についての研究が目をつけた。また基礎研究の分野では骨吸収、骨密度、歯周組織の再生と加齢との関係についての発表が見られた。日本老年歯科医学会、補綴学会の高齢者歯科関連の研究でも報告が多く、今後も高齢者歯科関連の基礎研究のトレンドとして扱われることは確かなようである。これらのセッション以外にGerontology関連としてNeuroscience 1題、Nutrition 2題、Periodontology 3題、Behavioral science 2題が発表されていたが、感覚器、歯根膜あるいは歯槽骨の反応と加齢の影響、高齢者と歯科医間のコミュニケーションのあり方といった研究内容であったように思われる。シンポジウムは“Relationships between Oral Conditions and Systemic Pulmonary Diseases in the Elderly”というタイトルで開催された。口腔内細菌と誤嚥性肺炎の関わりについての報告は昨年の学会でも報告があったが、これを受けてのものと思われる。座長Dr. J.Shipによる高齢者の口腔内状況と肺疾患の関係についてのレビューにはじまり、口腔内状況、歯周、栄養摂取状況の改善が肺疾患の改善に関係があることが報告された。今後、高齢者の残存歯が増えること、また高齢者が全身疾患のために良好な口腔清掃状態を保てなくなることも考えられることなどから、解決策を巡ってのさらなる研究が待たれるところである。さて最後に例年通り、Lunch and Learningのセッションが今年も行われ、2日間、30台のテーブルで昼食囲みながら肩肘の張らないdiscussionが行われた。その中で、Geriatric Dentistryに関する研究に携わっているDr. Michael MacEnteeのQualitative Methods in Dental Researchというセッションに参加した。今回のポスター発表の中でも、少数ではあったが、アンケート調査の妥当性、高齢者の口腔健康状態のスクリーニングの信頼性などに関する発表が見られた。他の研究領域でも調査対象の偏り、データに存在するバイアスをどの様にして取り除くかということが盛んに論議されている。とくにGeriatric Dentistryの臨床研究ではこれまでのところ計測学に比べ、疫学調査、聞き取り調査から得た大量のデータから結論を導くことが多いため、得られた結果の解析方法は非常に重要なところである。これらの問題に如何に取り組むかを議論し、実際の事例に基づき、解決策を話し合った。最後にReferenceを提示して、今後の研究に役立てるようということと終了した。非常にInteractiveでしかも少人数なためFriendlyで、得たものが多かったように思われる。日本人の研究者として今後も参加を呼びかける一方、日本の学会でもこのようなDiscussionを持つべきだと強く感じた。

5. Periodontal research group

山崎 和久 (新大・歯・保存)

第75回IADR General Sessionが3月18日から3月23日にかけて米国フロリダ州オーランドで開催された。これまでに最

多の3,500題を越える演題数のなかでperiodontal researchに分類された演題数はおよそ370題を数えた。Microbiology/Immunologyの中にも関係する演題があることを考慮すると1割以上がperiodontal research関連の演題ということになる。中でも病因に関連した演題が最も多く、特殊なポピュレーションを対象にして重要な因子の検索を試みた報告が注目を集めた。特にLPS刺激において重要な働きをするCD14分子が欠損している疾患罹患者においてはIL-1 β , PGE₂の産生量が低く、歯周病原細菌に対してresistantであることが報告された。免疫応答に関連した分子を特異的に欠損したりあるいは過剰に発現するような疾患患者の解析も歯周疾患の免疫機構を理解する上で重要であることが改めて認識された。一方歯周病関連細菌に対するワクチン療法の基礎研究を集めたセッションもあり、最終日にも拘わらず熱のこもった討論が繰り広げられた。3月20日にはDr. Steven Offenbacherによる座長のもとPeriodontal research groupのbusiness meetingが開催され、1997年度の執行部のメンバーが以下のように発表された。

President : Dr. Thomas Hassell

President elect : Dr. Denis Kinane

Secretary : Dr. Maurizio Tonetti

Councillar : Dr. John E. Horton

さらに無記名投票により新treasurerに大阪大学歯学部 岡田 宏教授が選ばれた。尚、次年度のtreasurer候補者としてDr. Chris McCulloch, Dr. Martha Somerman, Dr. John Waltersが選出されている。また、ミネアポリスおよびニースの学会のシンポジウムのテーマ(仮題)としてIgA in Periodontal Disease, The impact of periodontal disease on systemic health, Connective tissue engineeringが挙げられた。また、Lunch and Learningの企画、提案のある方はtreasurerの岡田 宏教授まで連絡されたい。Periodontal research groupのmemberはDr. Tonetti宛(tonetti@zmk.unibe.ch)までE-mailを送り個々のE-mail addressおよびpostal addressを知らせて下さいとのことである。日本におけるIADRの会員数は米国に次いで多く、今回日本からの演題は400題を越え、会員数に見合うアクティビティの高さを見せた。さらに会員数の増加とともにIADRにおける日本の役割も年々重要になってきており、現在President-electを務める作田 守先生に加えてbusiness meetingにおいて大阪大学歯学部口腔治療学講座の岡田 宏教授がtreasurerに選出されたことはIADRの日本に寄せる期待の大きさを示したものと見えよう。

6. Pulp biology group

池田 英治 (医歯大・歯・保存)

Orlando大会開催中の3月20日(木)午後5時から各グループのbusiness meetingが開かれ、pulp biology group

では次のような内容が取り上げられた。

1. グループ役員の交替: 今回のミーティングをもって、(1) presidentはDr. Närhi, M(Kuopio, Finland)からDr. Goodis, H (UCSF)に、(2) vice-presidentはDr. Goodis, HからDr. Stashenko, P (Forsyth)に、(3) editor of newspaperはDr. Holland, R (Michigan)からDr. Rutherford, RB (Michigan)に引き継がれた。
2. 1995年千葉ミーティングのプロシーディングスが完成した件について、編集スタッフに対する感謝の言葉と拍手が贈られた。
3. メンバーのE-mailアドレスをDr Fitzgerald, M (Michigan)まで知らせて欲しいとのことが連絡され、また近日中に本グループのホームページの開設を検討中とのことであった。
4. 今年(1997, Orlando)はグループ内の総演題数が、昨年(1996, SF)と比較して20%減少したことを危惧しているとDr. Närhiからの報告があった。
5. Dr. Rivera EM (Iowa)から会計報告がされ、現在の累積赤字(\$40,000)は銀行に預金してあるとのこと。
6. 来年のニース学会で、グループ内のtravel awardを2名に出すことが、Dr. Närhiより提案され、その意義について白熱した討論がなされた。話は選考対象と選考基準にもおよび、2名を選ぶことが挙手による全会一致で採択された。
7. その他: Dr. Kim S (Pennsylvania)がシャーロットシンポジウム(1991年)を主催した経験から、集めた金(1991年にNIHから\$40,000寄付を受けた)は出版するとすぐ消えるので、臨床歯科医を含んだ広範囲の参加と演題募集した方がいいとの指摘があった。
8. ニース会議の後にサテライトシンポジウムをフィンランドで行う予定で4つの都市が候補であるが未決定である旨がDr. Närhiから報告された。それに対して、Dr. Kimから若手研究者の参加が望まれるので、移動の旅費を考慮して交通の便利な場所で開催して欲しいと注文があった。
9. Presidentとしての1年間の労に対して、皆を代表してDr. GoodisからDr. Närhiに感謝楯が贈られた。

Pulp biology group 発表内容

Orlando大会ではPulp biology groupの発表では、歯髄(細胞)機能、修復能、修復材の歯髄への影響、水酸化カルシウムに関する研究が多かった。質問が集中した演題を中心に総括すると、成長因子とサイトカインは発育、修復、炎症に関与しているが、Naftelら(Mississippi)は抗NGFウサギ血清で処理した子イヌを用いて、臼歯根尖部付近の歯髄枝は他の神経よりNGFの影響が強いことを示した。その他成長因子の象牙質形成、基質統合に関与する研究がShibata, Piesco, Coil, Bowles, Perryらによってなされた。Kawashima(Forsyth)らはマウスで8種のサイトカインが細菌侵襲に対してネット

ワークを形成して、根尖性歯周炎の骨吸収に関与することを示唆した。また、Nakanishi (徳大) らは *in vitro* 実験系で、多形核白血球が炎症時に細胞外基質に働き細胞間結合に障害を及ぼし、組織破壊が生じることを示した。Yamamoto (医歯大) らはネコ歯髄に強い刺激を加えた際に他の歯から軸索反射由来の血流変化と神経発射がみられることを示した。

Ikeda (医歯大) らは独自に産生したモノクローナル抗体で同定した新鮮単離象牙芽細胞にパッチクランプ (whole cell) 法を応用し、ネコ象牙芽細胞は電位依存性チャンネルを有さないことを明らかにした。また、Selden (Texas) らはマウス培養象牙芽細胞と培養歯髄細胞は、他組織由来の結合細胞よりレジモンモノマーの毒性に対する感受性が高いことを示した。Hanksら (Michigan等) は培養象牙芽細胞 (MDPC-23) に関する3つの演題を発表し、bis-GMAに対する反応性が他細胞と異なり、象牙質特異的のマーカに染まり、APP活性を示すことを明らかにした。また、Hayashi (徳大) らが分離した歯乳頭由来の細胞 DP-805 は、線維芽細胞形態で、von Kossa 陽性の硬組織を産生し、コラーゲン I, III, osteopontin, osteonectin, APP への mRNA を発現した。歯内治療の分野では電気的根管長測定器の有益性 (Barthel ら, Berlin; Streiff ら, Milwaukee), 根管拡大での XeCl-excimer レーザーの使用可能性 (Haffner ら, Munich), 根尖部根管洗浄における NaOCl と EDTA の有効性 (Degzman ら, Milwaukee) が示された。また、接着性レジンあるいは未重合成分の歯髄への影響をみた研究が7題あり、Fitzgeraldら (Michigan) はヒト生活歯で象牙質質窩から未重合レジモンモノマー (TEGDMA, HEMA) は生活象牙質を通過して歯髄細胞に影響しうることを示唆した。そして、イヌを用いたモデルで、直接覆髄後の神経の再生は4-METAの方が水酸化カルシウムよりも遅い (Nakamura ら, 東歯大) ことも示された。

D. シンポジウム報告

1. シンポジウム "Current Concepts and Controversies in Vital Pulp Therapy" に参加して

吉山 昌宏 (徳大・歯・保存)

合衆国 Orlando で開催された第75回 IADR において、生活歯髄療法に関するシンポジウムが D.H.Pashley 教授の司会の下に5人の演者の講演および200人近い参加者からの質問討論の形で3月21日に3時間の予定を大きく延長して行われました。まずこの分野における長年の第一人者である H.R.Stanley 教授 (Florida 大学) より、水酸化カルシウム製剤の直接覆髄における有効性と確実性が病理像を基に示されるとともに、dentin bridge に生じるトンネル状欠陥は無視できないという指摘がありました。次に、C.F.Cox 教授 (Alabama 大学) より、dentin bridge の形成が必ずしも直接覆髄の成功を意味しないことや接着性レジンを用いた直接覆髄の安全性がサル動物実験結果から報告されました。これに対して、C.H.Pameijer 博士

(Connecticut 大学) より、サル動物実験の結果からレジン直接覆髄の危険性が提示され、Cox 教授や近年の我が国での研究成果とは大きく異なるものでした。続いて A.J.Gwinnett 教授 (New York 州立大学) の講演予定でしたが、3月17日に学会出張中にホテルで心不全により死去されたとの訃報があり、参加者全員に大きな悲しみをもたらしました。最後に、近年象牙芽細胞培養系の確立に成功し高い評価を受けている Mac Dougall 博士 (Texas HSC 大学) から、各種歯科材料の生体親和性の評価にこの培養系が有用であることが報告されました。質問討論では、レジン直接覆髄に否定的な見解を示した Pameijer 博士に批判的な質問が多く、加藤喜郎教授 (日歯大新潟) が日本での実験方法との相違点を指摘するとともに、Pashley 教授が日本でのレジン直接覆髄研究の進展を報告していた。今後このような活発なシンポジウムが生活歯髄療法の発展につながることを期待して今回の報告を終えさせていただきます。



Orange County Convention Center

(写真は阪大・村上先生よりご提供いただきました)

2. シンポジウム "Extracellular Matrix Proteins (ECM) of the Tooth" に参加して

石井 (谷) 信之 (神歯大・保存)

M. MacDougall 主催による "Extracellular Matrix Proteins (ECM) of the Tooth" シンポジウムは、100名を超える聴衆を集めて開催された。ECM 領域における最近の研究は、1985年にマウス Amelogenin の cDNA の一部がクローニングされて以来、多くの研究者による主要 ECM の cDNA クローニングの先陣争いが鎬を削る状況であったが、1996年に ameloblastin, amelins, enameliysin, enamelin, dentine phosphophoryn (DPP), dentine sialoprotein (DSP) の complete cDNA の解明が相次いで報告され、本学会においてのみならず歯学研究領域の中でも最も hot な研究分野の一つとなっている。本シンポジウムでは、5名のシンポジストにより enamel ECM に関して4題、dentine ECM に関して1題の報告が行われた。Enamel ECM の cDNA sequence につい

ては、既に amelogenin, tuftelin および sheathlin について報告されているが、J. P. Simmer の報告した enamel in enamel ECM cDNA sequence に関する第 4 番目の報告に相当し、3907塩基からなる遺伝子によりコードされた1104個のアミノ酸から構成される124kD, pI=6.5のproteinであることが明らかにされた。また、EMSP1についてもcDNAクローニングの結果、254個のアミノ酸から構成される serine proteinase に近似した protein であることが報告された。また、P.Krebsbach によって human ameloblastin (45kD, pI=5.5) が、chromosome 4q21 に位置することが報告された。さらに、M.M. Bashir により、tuftelin gene の13個の Exon 中の第 2, 5, 6 exon で alternate splicing が起こることが報告され、本シンポジウムの中でも最も脚光を浴びた。尚、M.L.Snead は yeast two hybrid system を用いた protein 検出システムで enamel ECM 間の protein 合成の相互干渉を検索したが、amelogenin, tuftelin および ameloblastin 間には相互干渉が認められなかったことを報告した。

Dentine ECM に関しては、A.George により象牙質形成不全の患者血液から genomic DNA を検索した結果、dentine matrix protein 1, 2 が検出され疾患との関与が示唆されたとの興味深い報告があった。

3. シンポジウム "Tobacco Smoking and Periodontal Health or Disease" に参加して

埴岡 隆 (阪大・歯・予防)

喫煙と歯周病に関連するテーマで、幅広い分野の研究者がプレゼンテーションを行うというので参加した。喫煙は、歯周病の重要なリスクファクターとして最近注目されはじめ、IADR でも喫煙に関連する演題数がこの数年急増しているもので、こうしたシンポジウムが開催されることは時期を得たものである。わが国では、歯科医師国家試験に『わが国歯周病の疫学的特徴』として何度か出題されているが、まだまだ発表が少ない分野でもある。今回、企画されたシンポジウムは、喫煙に関連する歯周病学の今後の研究の方向付けを模索する意味で非常に興味深いものであった。

さて、シンポジウムでは、疫学、口腔環境学、病因学、病理学、薬理学といったそれぞれの専門分野で活躍する第一線の研究者により、歯周病の治療と予防の両観点からプレゼンテーションが行われた。まず、UCサンディエゴ校メディカルセンターのD.Burns氏により、喫煙の薬理学的な生体への影響を中心に、喫煙と関連する慢性疾患についてこれまでの医学的知見の紹介があった。

この後、歯周病学の分野での話題提供が行われた。SUNYバッファロー校のR. J. Genco氏から、喫煙習慣と歯周病との関連について疫学分野における新しい知見として、青少年を対象とした調査研究により、歯周病の発症にも喫煙習慣が強く関与していることが報告された。同じく、SUNYバッファ

ロー校のJ. J. Zambon氏から、喫煙の歯周組織への影響について、口腔環境学、病理学的見地からの報告があった。またカロリンスカ研究所のJ. Bergström氏は長年にわたる歯周病臨床における研究成果の要点を示し、歯周治療における喫煙の影響が、外科的治療、非外科的治療の両面で明確になったことを発表した。

最後に、インディアナ大学のA.G. Christen氏は、歯科診療所における禁煙プログラムを示し、さらに、社会学的見地からさまざまな禁煙介入方法について例をあげて説明した。そして、今後、歯周病学に立脚した喫煙問題に対する歯科界の社会的貢献の可能性が示された。

シンポジウムの最後には、歯周病患者の喫煙について、様々な角度からディスカッションが行われた。オーガナイザーであるJ. Bergström氏は、「喫煙が種々の慢性疾患の主要原因であることが示されているが、歯周病がこの疾病リストに加えられようとしている」とのコメントがあった。出席した様々な分野の研究者が、このテーマでまだまだ残されている未開拓部分を解明するためのヒントを得ることができたようであった。

E. 第75回 IADR に参加して

1. 唾液由来 Secretory Leukocyte Protease Inhibitor について

王 宝禮 (大歯大・薬理)

本学会ではおよそ30題近い Human Immunodeficiency Virus (HIV) 関連の発表があり、そのなかでも最近話題を呼んでいるもののひとつに唾液中に存在するといわれる抗 HIV 活性物質があります。この研究の基本的発想は「実際唾液中には HIV やその DNA も存在するが、HIV が口腔感染 (kiss) する可能性が低い理由に、唾液中に HIV に対して何らかのインヒビターが存在するのではないだろうか」というところにあります。数年前より IADR でも抗 HIV 活性物質のひとつと考えられる唾液中の Secretory Leukocyte Protease Inhibitor について注目が集まり始めました。発表者の先生方は皆 Secretory Leukocyte Protease Inhibitor を "slippy" と呼んでおりまして、私の耳にはスリッピーと聞こえました。さてこのスリッピーはセリンプロテアーゼインヒビターであり、また以前より好中球由来のタンパク分解酵素を阻害し、生態の自己防御反応に深く関与していることが言われており、この点から唾液中のスリッピーに着目したと思えます。私自身も永年唾液の研究に携わるなか本研究には大変興味を覚えることもありまして、今回スリッピーについて御報告させていただきます。ここ数年来スリッピーに関する報告では、スリッピーによる HIV の感染阻害説は多岐にわたります。今回の本学会においても、その論議は活発に行われ、特にワシントン大の Prof.E.M.Vigoren らの報告では MAGI (Multinuclear Activation of Galactosidase Indicator) assay 法によりヒト耳下腺唾液中のスリッピーの濃度では抗 HIV 活性の可能性が低く、他の物

質の可能性が高いことを示唆され、またパシフィック大の Prof. N. Uzgunes らの報告ではマクロファージに HIV を感染させる実験系で ESI-MS (Electrospray Ionization Mass Spectroscopy) 法を用いリコンビナント・スリッピー自身が直接抗 HIV 活性を引き起こすのではないと述べておりました。このように今後さらなるスリッピー研究の展開を楽しみにしております。

2. 口腔細菌学関連の演題について(1)

加藤 哲男 (東歯大・微生物)

これから来る夏のきびしさを感じさせるような陽射しの中、75th General Session of the IADR がオーランドにおいて開催されました。会場となった Orange County Convention Center は、とてもきれいな大規模な施設でした。Omni Rosen Hotel に宿泊された先生方は、そのホテルがセンターに隣接しているというにもかかわらず、会場として使われたのがその反対側ということに通うのに苦労されたことと思います。私は Orland Marriot に泊まったのですが、ここはホテルとは名ばかりの…、この話は別の機会にしましょう。さて私が日頃お世話になっている口腔細菌に関する演題は、例年通り “Microbiology/Immunology” と “Cariology” および “Periodontal Research” のセクションで主に発表されました。齶蝕原性菌としては、*Streptococcus mutans* と *Streptococcus sobrinus* を中心にして非常にたくさんの演題が出ていました。歯周病原菌としては、*Porphyromonas gingivalis*, *Actinobacillus actinomycetemcomitans* および *Treponema denticola* に関するものが多く、*Prevotella intermedia* や *Eikenella corrodens*, *Bacteroides forsythus* などの演題もありました。内容としては、病原因子の分子生物学的解析、新たな病原因子と思われるものの性状、宿主側に関するもの、また診断法や治療・予防に関するものなど多岐にわたっていました。齶蝕あるいは歯周病原因子を明らかにし、その特定のペプチドを合成してワクチンとして使う、そして防御性抗体を効率よく産生させる免疫法を検討する、という流れの中に口腔感染症をコントロールしようとする今後の期待されます。宿主側の問題としては、食細胞に関わるものやサイトカインに関する発表が多く、特にサイトカインでは IL-6 に関するものがよく目に付きました。22日の午前中の “Microbiology/Immunology” の Oral session では、dental unit water line における biofilm の形成など歯科ユニットの water line や air line での菌の繁殖に関わる問題と効果的な防止策に関して論議されていました。また “Relationships between Oral Conditions and Systemic Pulmonary Diseases in the Elderly” というシンポジウムでは、高齢者における歯周病と肺炎との関連性など、oral health と全身的な肺疾患との関連性が論議されました。

3月19日から23日と、5日間にわたって行われた学会でしたが、私にとってはいささか長すぎるなという感じでした(演題数の多さからすると仕方がないのかもしれませんが)。次回は、1998年6月24日から27日の予定でフランスのニースで開催され

ます。教室の仲間達は、「来年はぜったいニースに行くぞ!」とはりきって研究を進めています。私は、たぶん留守番です…。

3. 口腔細菌学関連の演題について(2)

石原 和幸 (東歯大・微生物)

日本語の機内放送までされていて、これは日本の国内便かと思うような便で第75回 IADR の開催地オーランドに着いた。

ここ数年来、口腔細菌の病原因子の遺伝子が解明されその作用が明らかになってきているが、今回の学会でも更に新しい分子生物学的アプローチによる発表が行われていた。*Treponema denticola* では本菌の付着と細胞傷害性に関与していると考えられている表層タンパクの遺伝子 (msp) がクローニングされその遺伝子配列が明らかになっていた。また本菌の走化性に関与する遺伝子群中に存在するタンパク分解酵素の発現の停止によって、本菌の表層のプロテアーゼの活性が上昇するという報告もなされていた。これは本菌の病原性因子産生に調節機構があることを示唆している。*Actinobacillus actinomycetemcomitans* では、他の菌で病原性因子の発現調節に関与することが示されている fur gene のクローニングが報告されていた。本菌では宿主細胞侵入性が以前から報告されている。今回はこれに関連して蛍光タンパクを本菌で発現させる試みがなされていた。この目的は蛍光を発する菌体を用いて菌と宿主細胞の相互作用を解析しようということである。これが成功すれば、本菌の宿主細胞への侵入のプロセスの解析に非常に有効な武器となると思われる。*Porphyromonas gingivalis* では早くから線毛、Arg-gingipain といった主要な病原因子が明らかにされていた。本学会ではこれらの遺伝子のワクチンへの応用の試みがなされていた。Sharma らは本菌の線毛遺伝子を発現する *Streptococcus gordonii* を作成し、その生菌をラット口腔に定着させて血中、唾液中で本線毛に対する特異抗体を誘導していた。Kohler らは *P. gingivalis* の赤血球凝集素遺伝子 (hagB) を病原性のない *Salmonella typhimurium* で発現させこれをマウスに口腔投与し、特異抗体の上昇について調べている。これらの結果は、病原性因子を毒性のない菌体で発現させ、その生菌を体内に定着させることにより防御性抗体を産生させるというタイプの歯周病予防ワクチンが可能であることを示している。今までクローニングによる結果が直接応用されることは少なかったが、これらの試みは、ワクチンをはじめとする臨床応用への可能性が非常に有望であることを示し、今後の展開が期待される所でした。というわけでとなりにディズニーランドという強敵があってもあまり気にならず過ごせた4日間でした。

4. 口腔腫瘍関連の演題について

石橋 浩晃 (九大・歯・口腔外科)

IADR には初めての参加であったが、私が予想していたよ

りも口腔腫瘍関連の演題は多かった。腫瘍の浸潤、転移に関連する発表のうち、関心を持った演題を幾つか報告する。Dr. H. Xueらは、舌癌由来の細胞株がAdhesion assayにより、Vitronectin, Collagen IV, Fibronectin, Lamininへの結合能が強く、それらは膜上に発現したIntegrin $\alpha 3 \beta 1$, $\alpha 5 \beta 1$, $\alpha 6 \beta 4$, $\alpha v \beta 5$ による基質への接着が関与していることを、系統だてて証明していた。また、基質に接着した癌細胞は基質を分解しながら遊走、増殖する必要があるが、その基質分解について、Dr. V.A. Heringらは、腫瘍間質の重要性を指摘し、腫瘍細胞が産生したbFGFにより、間質の線維芽細胞がuPAを産生、放出し、さらに不活型のMMP-1が活性化されることが腫瘍の増殖に重要であることを、*in vitro*実験系において証明していた。浸潤した腫瘍細胞が転移巣を形成するためには、血管浸襲を必要とするが、腫瘍血管は腫瘍細胞が産生、放出した血管新生因子により形成される。最近注目されている血管新生因子のひとつにVEGFがあり、腫瘍細胞から放出されたVEGFは周囲組織の血管内皮細胞を刺激する。内皮細胞のVEGF受容体には、Flt-1とKDRが主であり、成熟個体ではFlt-1が重要であると考えられているが、Dr. A. Leらはヒト真皮微小血管内皮細胞ではKDRが優位であると報告しており、腫瘍血管新生におけるKDRの関与を示唆していた。

5. "Specific Immunology" のセッションに参加して

島内 英俊 (阪大・歯・口腔治療)

1997年3月19日から23日までの5日間開催された第75回IADR総会におけるMicrobiology/Immunology group関連の発表は272演題を数え、22セッションにわたって活発な討議が行われた。今回はそのうち3月20日にひらかれたSeq #41 Specific Immunityに参加したので当日の会議の様態を報告する。このセッションにおいては、J. Califano (Virginia Commonwealth University), S. Sweet (Guy's Hospital, UK)の両博士が座長をつとめたが、計11題の発表と討議が行われた。まず、s-IgA抗体レベルに関するGuy's HospitalのChallacombeらの発表に続き、歯周病ワクチンの開発を目指した発表がSUNYおよびUniversity of Floridaのグループより行われた。前者はリコンビナント*P. gingivalis*線毛蛋白を免疫抗原に用いた場合の血中及び唾液抗体レベルの消長について、また後者は同じく*P. gingivalis*由来のhemagglutinin遺伝子无毒化した*S. typhimurium*に組込んだ免疫源に対する抗体応答についての発表であったが、これらの研究から歯科領域におけるワクチン開発への遺伝子工学の応用ということを改めて意識させられた。続く3演題はいずれもTewらのグループのもので、歯周病患者の血中特異抗体の動態とその誘導メカニズムに関わるものであった。さらに残り4演題は全て歯周病患者におけるT細胞機能解析目的としたものであったが、最初の二つは歯周病患者の末梢血を用いたもので、一つはTCR β 遺伝子の発現パターン、もう一つはリンパ球サブセットを調べたものであ

た。これらの患者試料を用いた発表を通じて考えさせられたのは、歯周病巣局所での免疫応答に関わるhostのみならずparasite側のfactorの多様さ、そして限られた臨床試料から何を解析することが歯周病の病因・病態を明らかにしていく上で有用なのかということであった。そして、免疫学および細菌学的なアプローチを行うためのツールが十分に整えられた現在においては、何をどのように攻めるのかという「戦略」の重要性を改めて認識した。

6. 歯内療法学のセッションに参加して

武市 収 (日大・歯・歯内療法)

IADRのPulp Biologyグループが中心となった歯内療法のセッションは会期中毎日行われ、口頭発表とポスター発表併せて約80編の演題について活発な討議が行われた。日本からの発表はそのうちの25%であり、年々その数が増加しているようだった。

発表の大半は歯髄または根尖病巣の基礎的な研究で、20%ほどが臨床的な報告であった。基礎的研究にはサイトカインや成長因子およびそれらのリセプターに関する報告が比較的多く、それらの演題では多くの聴衆が集まっていた。また、硬組織形成に関する報告も多く、骨芽細胞の骨誘導能や歯髄細胞の石灰化能に関する新しい知見も報告された。1965年Uristによって報告されたBone Morphogenetic Protein (BMP)は近年多くの研究者の努力によりそのcDNAのクローニングがなされ、分類されたが、そのうちのOP-1 (BMP7)に関する研究が2題報告された。すなわち、OP-1は歯髄組織の石灰化を誘導し、しかも興味深いことにOP-1は歯髄組織内でBMPレセプター2型のmRNAレベルを調節しているということであった。これらの報告には特に多くの聴衆の注目を浴び、質問や活発な討議がされていた。臨床的研究としてはエキシマレーザーや新型ニッケルチタンファイルを用いた新しい根管形成法のほか、加熱ガッタパーチャー (Thermafил)を用いた根管充填法の研究が報告されていた。また直接覆髄法に関する研究では、レジノンボンディング剤を用いた方法が紹介され、石灰化促進作用はないが歯髄細胞への為害作用もないことを基礎的研究により示した。乳歯へ臨床応用した場合の1年経過例 (20例)でも臨床症状を誘発させることなく、X線所見や組織学的な検査でも炎症像を示さなかったことから、水酸化カルシウムによる石灰化を図らなくとも歯髄の保存という点では臨床的に有効な方法であろうと結論づけていた。

7. Craniofacial biology 関連の演題について

山崎 清美 (医歯大・歯・矯正)

今回初めてIADRに参加したが、第一印象としてこの学会のカバーする広範囲な領域にまず驚かされた。そして、特にDental materialsやPeriodontal researchのセッション

では、常に会場が満員で、熱のこもったホットな発表や論議が行われていたのが印象的であった。

私はブラジルからの国費留学生で、Craniofacial biologyのセッションに大学院の仕事であるメッケル軟骨の成長発育過程における副甲状腺ホルモン関連ペプチド (PTHrP) の temporal-spatial localization について口演発表を行った。今回の学会印象記では、Craniofacial biologyの分野で自分の研究にも関連した興味深い演題について触れておく。

#1936 Role of PTHrP in the development of murine molar. (Liu, J.C. *et al.*) では、マウスの tooth germ の培養系に PTHrP の antisense を適用した結果、正常な成長が阻害されたことが報告された。正常ラットのエナメル器と歯乳頭における PTHrP の発現も考え併せると、歯の成長発育における PTHrP の役割は今後さらに興味深いテーマの一つと考えられる。

#2826 Histochemical observations on the developing mouse mandibular condylar cartilage. (Shibata, S. *et al.*) は、従来から指摘されている下顎頭軟骨細胞の特異的性格に関する報告であった。すなわち、下顎頭軟骨では軟骨マーカーのひとつである type II collagen と石灰化を伴う軟骨細胞の肥大化のさいみられる type X collagen の局在がほぼ同時期に同部位に認められた。

#2832 Mutation of collagen type II, IX, XI and Stickler syndrome. (Safari, M. *et al.*) では、Stickler syndrome の多い家系を用いて、最近しばしば行われる linkage analysis の結果が報告された。その結果、この家系では collagen type II, IX, XI のいずれもこの疾患の原因遺伝子と同定されず、病因の多様性が示唆された。実際に linkage analysis を行っていくプロセスは、想像以上の時間と苦労が必要らしいが、顎顔面領域に異常を持つ遺伝性の疾患は多く、今後歯科においても linkage analysis の重要性は高まっていくことが考えられる。

#2824 Distribution of Indian Hedgehog mRNA in the developing mandibular condyle. (Hartman, B. *et al.*) は、形態形成因子の一つとして注目されている Indian Hedgehog が下顎頭軟骨の増殖層に発現されていることを *in situ* hybridization 法によって報告した。結果として、この発現部位は Vortkamp, A. *et al.* が limb bud を用いて Science 誌に報告した発現部位との類似性が示唆された。下顎頭部の軟骨内骨化のプロセスとこれに関与する因子は、Craniofacial biology の分野でも顎骨の成長発育を考える上で重要なテーマの一つで、今後さらなる研究の進歩が期待される。(日本語代筆：須田直人)

F. Hatton Award Competition に参加して

高柴 正悟 (岡大・歯・保存)

今年は縁あって、Hatton Competition への最後のチャンスを得ることができました。JADR の会員数の増加に伴って JADR からの推薦枠が 5 人に増えて、Post-doctoral のカテ

ゴリーにノミネートされました。日本では Abstract のみでの選考後にノミネートされ、JADR でポスター発表を行って JADR 会員に披露します。その後、IADR の Hatton Competition の場へ行くことになります。各国からのノミネーターが Pre-doctoral と Post-doctoral の各カテゴリーに 12 人ずつありました。それに 21 人の AADR Hatton Competition からのノミネーター (IADR 会期中に発表・審査があります) が各カテゴリーに 5 人ずつ参加して、最終的には 17 人で競いあうことになりました。各ノミネーターは IADR Unilever Travel Award (または IADR Division Travel Award) 受賞者となり、旅費の援助があります。

Post-doctoral カテゴリーでは JADR の山田正教授を含む 5 人の judge の前で 5 分間のポスター発表と 5 分間の質疑応答を行いました。その際の debate 能力が大きく judgement に関係するようでした。Science に発表した論文の一部を発表した AADR からのノミネーターでさえ賞を得ていませんでした。Pre-doctoral の 1 位は UK から「Identification of *Candida* in Archival Tissue Using Molecular Techniques」、2 位は Canada から「Protein Engineering Analysis of the 72-kDa Gelatinase Collagen Binding Domain」という研究でした。Post-doctoral の 1 位は USA から「Integrin-Fibronectin Interactions are Critical for Osteogenesis and Osteoblast Differentiation」、2 位は Australia から「Molecular Modeling of Multi-phosphorylated Sequence Motifs on Calcium Phosphate Surfaces」という研究でした。このオーストラリアからの研究者は私の直後に発表した女性の biochemist で、後日の一般ポスター発表と同時の発表時には、3 か月になる息子を連れてきて授乳をしながらの発表でした。いずれの受賞者も英語を母国語としている研究者です。日本の研究者も世界で対等に渡り合えるためには英語での debate ができる必要があると痛感した次第です。

さらに、前述のオーストラリアからの女性研究者 (biochemist) の例にあるように、歯学の研究の進歩には歯学部出身の研究者だけではなく、歯学に必要なとされる研究分野の研究者をどんどん取り込む必要があると感じました。なお、IADR 後に NIDR の Director である Dr. Slavkin を訪問し、昨今の歯学研究の動向について話し合ってきました。彼の話してくれた内容は、帰国後に届いた J. Dent. Res., 76(2):628-630, 1997 にあるように、以前の“dental”という概念から脱皮しようとしているものでした。歯学が周辺の医学と自然科学に対して何を果たすことができるかが問われるようになってきているのかなと感じます。

今後の日本の歯学研究を担おうとする私たちのような若手研究者たちに、IADR Hatton Competition は刺激を与えてくれる機会になりました。その機会を与えて下さいました諸先生方に感謝するとともに、この経験を今後 (自分だけでなく後輩たちに) 活かすべきだと心に誓った次第です。

G. William J. Gies Distinguished Scientist
Lectureに参加して

安孫子 直光 (日大・松戸歯・生化)

1997年IADR学会, William J. Gies Distinguished Scientist Lectureの荣誉は, University of IowaのDr. Jeffrey C. Murray教授に与えられた。題は, "Ethics and the Human Genome Project"である。Murray教授は, "Research in the highest expression is open-minded."の言葉で歯科界そして自然科学に対するGies博士の業績を讃えられた後, "I don't know anything about the bell curve, but I say heredity is everything"の言葉とNature, 27 Feb 1997号表紙のクローン羊のスライドで講演を始められた。まずHuman Genome Projectの概要と方法論について, ポジショナルクローニング, 連鎖地図, 染色体リアレンジメント, YACコンテイング, コスミドライブラリー, プラスミドライブラリー, 塩基配列データベースなどの説明があり, また動物モデルの作製, 疾患遺伝子の探索, 遺伝子変異のスクリーニングなどの研究戦略の紹介があった。そして歯科領域では, 歯の形態異常を伴うRieger Syndromeを例にあげて染色体異常, 転座, 連鎖地図の研究からポジショナルクローニング, 疾患遺伝子探索の成果にわたって報告され, 疾患遺伝子がホメオボックス様遺伝子であったこと, 臨床研究から疾病患者の遺伝子変異がホメオドメイン上に起こっている実際例, さらに疾患モデルマウスの作製についての紹介があった。その他, 口蓋裂についての研究の現況が紹介され, 疾患遺伝子同定に向けてのHuman Genome Projectの有用性と必要性を議論された。最後に, Human Genome Project研究がもたらす臨床面への期待として遺伝子診断への応用と遺伝子治療の開発をあげられた。そして, 人道上の観点から研究にあたっては, 医学倫理を十分に考慮する事が重要であると結ばれた。いよいよ歯科医学領域でもHuman Genome Projectの推進が話題に取り上げられるような時代が到来した感を強くした。数百人を収容できる会場で行われた全席が埋まり, 立って聴く会員もでるぐらい盛況であったが, 本講演の終了直後, 同会場で"The Human Genome Project"シンポジウムが開かれ, Jeffrey C. Murray教授もシンポジストの一人として改めてHuman Genome Projectについて発表され, シンポジウムの内容には, Chediak-Higashi Syndrome, Breast Cancer, Social Ethics of the Human Genome Projectも演題として含まれていたが, 会場の1割も満たない状態であった。果たしてHuman Genome Projectの内容で盛況であったのか, Dr. Gies Memorial Lectureの学会行事としての参加が単に多かったのか知る術もないが, 少々残念に感じるとともに歯学研究者のゲノム研究への関心がこれを機会に深まることを期待したい。

H. サンスターチャペルヒルシンポジウム'97に参加して
新田 浩, 石川 烈 (医歯大・歯・保存)

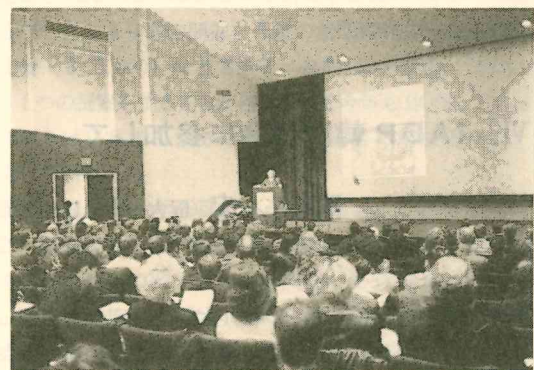
日本ではまだ桜も咲いていない時期であったが, 丁度当地では, 花水木が咲き始め, 新緑の香りもただよいはじめた, 1997年3月24, 25日の2日間, サンスターチャペルヒルシンポジウム'97が米国North Carolina州Chapel HillのNorth Carolina大学で開催された。テーマは"Periodontal Diseases and Human Health: New Directions in Periodontal Medicine"である。サンスターがスポンサーとなるシンポジウムは1986年神戸で第1回が開催されて以来, これが4回目である。今回のシンポジウムの準備は3年前より計画され, 1995年, Planning committeeはシンガポールのIADRの際に開かれ, ついで, 1996年のサンフランシスコのIADRの際に会議が開かれ細かい検討を加えた。石川もその一員として, 当初より計画立案に参加することができた。それまでの多くの研究成果により, 歯周病の原因がプラーク, とりわけ歯肉縁下プラークであることが解明されたが, 一方, プラークだけで, 歯周病の発症と進行を説明できないこともわかってきた。この会議が計画された当時は糖尿病などの全身疾患や喫煙等の環境因子が歯周病の発症と進行のリスクファクターであることが疫学的に証明されはじめた時期であった。また, 重篤な歯周病が心臓血管疾患などの全身疾患のリスクファクターになり得るという可能性がやっといわれはじめられてきた時期でもあり, 今回のテーマが適切かどうかはやや不安な面もplanning committeeは感じ, 十分な内容のシンポジウムができるか随分検討された。しかし, その後のこの方面の発展は目を見張るものがあり, 現在まで歯周病とさまざまな全身疾患との関係に関する研究が多数発表され, まさに時代にあったテーマとなった。当初, 100人程の参加者を見込んでいたが, ふたを開ければ400人を越える参加者となり, 会場の収容能力を心配する程の盛会であり, UNCのDeanであるDr. Stammの見事な学会運営, Banquetの盛り上がりなどほとほと感心するばかりであった。シンポジウムの初日は"Systemic diseases and conditions as risk factors for periodontal diseases"と題し, 取り上げられた全身疾患, 全身状態は糖尿病, HIV感染症, 喫煙, 腎疾患, 加齢, 栄養, 遺伝, ストレス, ライフスタイル, 骨粗鬆症と多岐に渡った。糖尿病については, 疫学的研究は一段落つき, 現在はその糖尿病の状態がどう歯周病にかかわるかという生物学的メカニズムについての研究の段階に来ている。Columbia大学のDr. Schmidtが"Advanced glycation endproducts in diabetic periodontal disease"という演題で講演し, 豊富で充実した内容を短い限られた時間のなかで, 論理的に歯切れよく発表していたのが印象的であった。日本からは岡山大学の村山先生が糖尿病と歯周病について, ライフスタイルと歯周組織の健康について, 大阪大学の雲石先生が, それぞれ講演された。石川がModeratorを務めた午後のセッションではDr. KornmanがIL-1遺伝子の多様性と重度歯周炎との関係を発表し, 歯周

疾患感受性の遺伝子診断の可能性を示唆し、場内から喝采をあげていた。また、さまざまなリスクファクター (Multidimensional factor) の程度を数量化し、総合的に点数で評価し、“Manageable risk” の範囲を決定するという Berne 大学の Dr. Tonetti の講演は、リスクファクターの概念を実際に治療に応用しようとするものであり、とても先進的であった。New York 大学 Buffalo 校の Dr. Genco はストレスが免疫機能を抑制することに着目し、ストレスの程度、唾液中のコルチゾン量と歯周炎の重篤度との間に関係があることを示した。また、Alabama 大学の Dr. Jeffcoat は骨粗鬆症の治療法としてホルモン療法あるいは抗炎症剤である bisphosphonate alendronate の投与を受けている患者は歯槽骨の吸収も抑制されることを示し、骨粗鬆症が歯周炎のリスクファクターになり得ることを示唆した。2 日目のテーマは “Periodontal diseases and oral infections as riskfactors for systemic diseases” で初日とは逆方向、つまり、歯周疾患が全身疾患のリスクファクターとなるかというテーマであった。まず、Washington 大学の Dr. Page が “The pathobiology of periodontal disease may affect systemic diseases: the inversion of paradigm” と題し、歯周疾患がいかに全身疾患に影響を与えるかについて講演した。歯周ポケットの内面積をトータルすると約 50cm² のほり、7 cm 四方の潰瘍を伴う病変が皮膚や内臓などの他の臓器にあると想像すれば、それが全身に影響を与えると考えるのは容易であると説明した。さらに、プラーク細菌は独自のエコシステムである “biofilm” を形成し、宿主の防御反応から身を守ると同時に、LPS の半永久的な供給源となり、宿主細胞からの IL-1b, TNFa などの proinflammatory cytokine さらに MMPs や PGE2 の産生を持続的に促進し、全身に影響を与えると講演した。今回のシンポジウムでは上記のようなメカニズムで歯周疾患がリスクファクターとなり得る疾患として、心臓血管疾患が大きく取り上げられた。日本ではあまり注目されていないが、北欧ではこの病気の致死率が高く、歯周病との関係が詳しく研究されている。まず、心臓血管学の権威者である Glasgow 大学の Prof. Lowe が心臓血管疾患について講演し、とくに血栓症の発症には血液の流動性が重要であり、疫学的に喫煙、高脂血症、感染症がリスクファクターとしてあげられることを説明した。それを受けて、North Carolina 大学の Dr. Beck が過去の心臓血管疾患と歯周病との疫学的研究を統計学的に注意深くレビューし、歯周炎が冠状動脈性心臓病のリスクファクターになり得ると結論づけた。そして、Glasgow 大学の Prof. Kinane がプラーク細菌の LPS や歯周炎によって産生されたサイトカインが、心臓血管疾患に寄与するメカニズムについて講演した。

老人介護施設の患者にとって、細菌感染は死に至る深刻な問題である。その感染源として、口腔、特に歯周ポケットが疑われはじめて、実際、脳あるいは肝臓の膿瘍から口腔細菌が同定されており、また、免疫無防備状態の患者では口腔細菌による菌血症、敗血症が起り得る。Toronto 大学の Dr. Limeback

は老人介護施設での疫学的調査を行い、肺炎を引き起こす呼吸器性病原菌が口腔衛生の悪い、重度の歯周炎患者のデンタルプラークから検出されること、さらにそれらの菌が院内感染することを発表し、患者の口腔衛生の向上が肺炎および、院内感染の頻度を減少させる可能性を示した。

Tufts 大学の Dr. Garcia は歯周疾患が死亡率に与える影響について講演した。彼は 1960 年代半ばから調査をはじめ、ベースライン時に全身的に問題のない健康な人を対象にし、25 年間以上フォローし、その結果、調査した 804 人中 146 人が 25 年の間に死亡に至っている。ベースライン時の歯周組織の状態と死亡率との関係を検討し、最も歯周組織の状態が悪かった集団は死に関して最も高いリスク状態であるといえることを示した。かれは “Gum disease kills”, “Floss or die” というキャッチフレーズを提唱し、高齢者において歯周病が人を間接的に死にいたらしめることを警告した。最後のセッションは “Oral inflammation associated with pregnancy complications” で、Duke 大学の Dr. Hill は早産した妊婦の羊水から *Fusobacterium nucleatum* が検出される頻度が高いことを報告した。この菌は腔内から検出されることはほとんどなく、口腔内から血行性に由来した可能性が高いことを示唆した。Alabama 大学の Dr. Hauth も同様に早産が感染と関係していることを示した。かれは将来の早産のマーカーとして、細菌性陰疾患と胎性ファイブロネクチン、IL-6 の存在および絨毛羊膜の感染を挙げた。そして、抗生物質投与により、早産が防止できることから、感染との関与を確認した。そのあと、North Carolina 大学の Dr. Offenbacher が “Periodontitis - associated pregnancy complications” について講演した。妊娠においては、ホルモンと局所のサイトカインが分娩、出産を調節している。しかし、母体の腔内にグラム陰性菌が感染すると、細菌の LPS により、PGE2, IL-1 などの分娩出産に関与するサイトカインが過剰に産生され、早産を引き起こす。しかし、早産の割合は全出産の 10% にものほり、腔内感染や喫煙など他の知られている早産のリスクファクターを考慮してもこの高頻度を従来の概念で説明することは不可能であった。そこで彼は歯周病がこの早産に関係しているかを検討したわけである。彼の発表は、ニューヨークタイムスまで取り上げられるまでになっている。彼は動



シンポジウム会場

物実験で *P. gingivalis* を感染させると、早産と胎児の成長障害が起こることを明らかにし、さらに、人の妊婦の歯肉溝滲出液中の PGE2 に注目し、低体重早産をした妊婦の歯肉溝滲出液中の PGE2 の値は正常な乳児を出産した妊婦に比べ高いことを、さらに低体重早産をした妊婦のなかでは、PGE2 の値と乳児の体重に濃度依存的な負の関係が認められたことを示した。こうして、歯周病が低体重早産の重要なリスクファクターになることを示した。このシンポジウムでは口演のほか2日間で13の招待ポスターと26の応募ポスターセッションがあった。日本からは招待ポスターで大阪大学の永田先生、応募ポスターで岩手医科大学の松丸先生、サンスターの梶原先生、日本大学の安孫子先生、明海大学の下島先生、日本歯科大学の沼部先生、東京歯科大学の石原先生と東京医科歯科大学から新田と多数の日本人の先生が選ばれ、それぞれの分野で発表を行った。このシンポジウムでは North Carolina 大学の Dr. Beck と Dr. Offenbacher はコンピューターを駆使したマルチメディアで発表を行った。当然、音楽あり、動画ありの発表であったが、驚いたのは、彼らの発表の中で、このシンポジウムの前に開催された Orlando での IADR の発表が過去の paper として取り上げられているだけでなく、このシンポジウムの第一日目で発表された paper が次の日には過去の paper として取り上げられていたことである。スライドを作製する時間が必要なく、コンピューターにただ入力すればいいだけというのは理屈ではわかるわけであるが、一分前の発表でも過去のものになってしまうという時間感覚は、衝撃的であった。今や、歯周病の発症と進行には口腔細菌などの病因因子、宿主の環境因子、心理社会的因子、遺伝因子、全身状態が複雑に絡み合っており、それぞれが歯周病のリスクファクターとなり得ることは周知の事実である。歯科医師はそれらのリスクファクターを注意深く吟味し、医師あるいはソーシャルワーカーと協力して診療に携わらなければならないことを再確認させられた。また、歯周病が心臓血管疾患や呼吸器疾患などの全身疾患のリスクファクターになるということは、歯科医療が、患者の健康の増進に寄与できる部分がさらに広がったことであり、歯科医師のなすべき使命がますます、重要になったことを痛感させるシンポジウムであった。このシンポジウムの成果は新しく創刊された Annual of Periodontology にまとめられることになっている。

VI. IADR 韓国部会に参加して

岡田 宏 (阪大・歯・口腔治療)

旧知の韓国歯周病学会会長・ソウル大学教授 Chong-Pyong Chung 博士のアドバイスもあり、無理に都合をつけて学会前日1日がフリーになるように日程を組んでみました。お蔭で飛

行機の遅れもあって、夜の10時半近く厳冬のソウルに到着しました。快晴のソウルの町並は、夜空に満天の星の輝をみるような美しさで圧巻でした。空港に近づくにつれて、車のライトで夜が更けても町が躍動している様子が手にとるように解りました。夜遅い便を予約したことでもあり、Chung さんにだけしか自分の到着を知らせておりませんでしたのに、KADR 会長の Kim 博士 (ソウル大学・理工学講座教授) が Chung さんと共に迎えていただきました。おまけに滞在中のスケジュールとソウルの観光案内の資料まで Kim 会長より頂戴し、零下15度の身を切るような寒さも彼らの心の暖かさに忘れてしまいました。

KADR の学術大会と総会は昨年度はホテルで開催されましたが、御多分にもれず韓国も経済事情が好転しないままの昨今であり、今年は経費削減のために会長のお膝下のソウル大学の講堂 (150名収容) と教室 (80名収容) の2会場を使って行われました。KADR の会員は約270名であり、当日の出席率を勘案すれば十分なひろさです。さらに会場となった講堂の出入口近くには2階の会場に通じるその建物のメインの階段があり、しかも踊り場のようなスペースがふんだんにあって、そこが格好のポスター会場となっており、小じんまりとまとまったすばらしい学会会場の雰囲気をかもし出しておりました。

まず、一般演題の口演があり、引き続いて10時より開会式が、さらにコーヒープレイクの後、特別講演が開始されました。これも特別講演者への配慮の賜なのではといたく感激いたしました。特別講演は Han 博士の "New Science and New Dentistry; The Future of Instruction of Health Science with Emphasis on Dentistry" でした。博士は1956年ソウル大学歯学部を御卒業後、American Korean Foundation Fellow としてアメリカ生活を始められ、滞米35年、36才で教授になられ、現在ミシガン大学名誉教授 (解剖学・細胞生物学が御専門) で、請われて帰韓され釜山にある東亜大学の初代医学部副総長の要職にあられる方です。滞米35年というのに美しい日本語で話しかけられ本当にびっくりしてしまいました。しかも「お客様が聞いておられるのに母国語のハングル語で講演して本当に済みませんでした。」と謝られ、韓国文化の節度の深さにただただ恐縮するばかり。「いえ、スライドが英語でしたので、ほれこんなに写し採らせていただきました。」と返礼するのが関の山でした。

私は Han 先生のような格調高い講演はできるわけがありませんので、現在進行中の教室の研究の1つである歯周病疾患の感受性をいかに鑑別するかの問題を "Diagnostic Strategies of the Differential Periodontitis Based on the Molecular Mechanisms of Periodontal Tissue Destruction" と題して英語で講演しました。片側に講演原稿をスライドで示しましたので、下手な英語の発音でも完全に意味が通じたと思います。Perio 関連の演題が少ないこともあり、Perio 関連の先生方は KADR にはあまり出席されていないのではと予測しておりましたが、活発な質問を頂戴いたしましたことから出席の先生方には病因に強い関心があることを確信いたしました。

シンポジウムは3題あり、1) Bone BiologyとしてBMPが取り上げられ、その他2) Fluoride Researchがう蝕予防の観点からあり、昨年JADRで招待講演いただいたPark博士御夫妻が参加されておりました。奥様のKim-Park博士が演者で弗素利用は基本的なメカニズムの理解が大切だと“Fluoride Distribution and Metabolism in the Body”と題して講演されました。Park御夫妻とは奥様の講演の前日、先生の同窓(元ソウル大学の歯周病学の教授のSon博士)がSumsung Medical Centerの歯科部長で現在御活躍です、その診療所を見学するために大学から車で一緒にお邪魔させていただきました。車中奥様が弗素の臨床への応用にはもっと基礎学的な知識が必要であることを強調されておりました。韓国歯科界が近年教育・研究にこの様なbasic scienceの必要性を強調し、その対策を講じ始めたとの印象を強く受けました。Son博士の診療室は素晴らしい一言に尽きます。小1時間の見学を終え、辞して外に出ますと車には駐車違反のレッテルが…。高台の高級住宅地域なのに韓国車の事情にびっくりしました。また行きも帰りも渋滞に巻き込まれてしまいました。更に3) Oral Cancer Researchのシンポジウムがあり、これは癌抗原、癌マーカーや前癌病変、アポトーシス等について講演がなされました。

一般演題は口演67題、ポスター15題でIADRの研究分類の殆どが網羅されている状況でしたが、中でもDental Materials, Mineralized Tissue, Craniofacial Biology, Oral & Maxillofacial Surgery, Prosthodontic Res.などが他の研究領域に比べてより多くの演題の発表がみられました。若手研究者の顕彰もあり、3人の応募とポスター審査があり2日目の総会の席で表彰されました。この賞はBOM Ho「汎湖」と呼ぶそうでして、これはKADR初代会長Kim博士の雅号から頂戴したとのことです。Kim博士自ら賞を手渡しておられました。

学会初日の晩に宴席に招待されました。アンティークが美しく飾られた一見由緒ありげな田舎の博物館という風情の場所、とっておきの韓国料理を御馳走になりました。集まられた先生方は前出のKim博士をはじめ、殆どがこれまでKADRの要職を歴任された方々(所謂President Committeeの面々で約30名くらいでしたでしょうか)でした。そんな席で挨拶をさせられまして、汗をかきかき下手な英語で、厳冬のなか暖かいお出迎えをしていただいたKim会長にお礼と、ソウル市の素晴らしい発展を物語る夜景の美しさ、昨年のJADRの学術大会(裏磐梯)で招待講演を戴いたPark博士への感謝と、その時の露天風呂での素晴らしい一刻、さらにIADR評議会ではいつも隣り同志の席ですし、近しい隣国同志、近くて遠い間柄にならないよう交流を深める必要性について等を申し上げたように思います。申し上げたいことが私のつたない英語でどの程度通じたかどうかは知りませんが、頂戴した抄録集にはさんであったパンフレット紙の裏に懇親会の直前に走り書きした素稿を挨拶が終わるやKim会長に記事にするからと取り上げられ

てしまいました。一瞬びっくりしましたが、それがかえって変なことを申し上げていないとの確信につながりほっと安堵したような次第でした。大役が終わった後は本当にリラックスして大変楽しくお酒と料理を堪能させていただきました。

学会は明日が2日目ですが、明日はKim会長公認のゴルフ大会をするとのこと。早朝7時に迎えをやるとのこと。凍てつく寒空でのゴルフ大会! 不安と楽しみの渦に交ぜた中で楽しい眠りにつきました。翌日も快晴でした。ソウル大学の先生方とソウルより1時間半のドライブの場所でゴルフを楽しみました。ソウルから高速道路で郊外都市へ。大きなベッドタウンでした。早朝10輛もの通勤列車が高架を走る様を見て、数年間の発展のすさまじさを目にした思いでした。ゴルフコースは素晴らしい場所でした。コースの変わり目毎に大きな野外ヒーターがうなっています。冷えた身体と手を温めながら、水の華咲く噴水の美しさにも見とれつつ、フェアウェーは昔習ったschneeballenknirschenという言葉の思い出させてくれる程、凍てつく大地を踏み締めてゆくゴルフの味は一味違った趣でした。終わってみればゴルフはいつものスコアーでしたが、本当に楽しい思い出を作ってくださいました。楽しい会食後、KADRのbusiness meetingに駆けつけました。車中、ソウル大学の先生から「昨晚の宴席は非公式だから、今晚こそ公式ですよ。きっとまた挨拶しなければならないですよ。」と言われ、昨日即席で作った原稿もKim会長に取り上げられたし、仮に手許にあっても同じ様なことを話すわけにもゆかないしと、本当に困ってしまいました。しかし、どうにかなるさと無手勝流の気持ちで臨みまして、そんな懸念には及ばず、business meetingは全くのKADRの事務報告会として運営され、私に恥をかかず時間がなかったことは何よりでした。会場は大学構内の食堂のような場所で開催され、弦楽四重奏(ソウル大学の学生諸君の出演ということでした)の楽しい調べをバックに氷柱(ワシの姿でした。若い研究者が世界の大空へ羽ばたけということなのでしょう)がライトを反射して、大学構内の食堂とは思えない雰囲気でした。会では前述の若手研究者の顕彰もあり、若い研究者共々大変和やかな雰囲気でした。最後に次期執行部の紹介があり、次期会長にBoo-Byung-Choi(崔教授・慶熙大)がなられました。先生は大歯大に留学され(約5年間)大変流暢な日本語をあやつられます。きっと私よりも大阪にお詳しいかも知れません。最後に私も一緒に皆様と何枚か記念写真を撮っていただきました。

今後、両国の親密度がいやが上にも高まり、アジアがアメリカ、ヨーロッパに匹敵する主要な地域としてIADRに貢献し、IADRが益々発展することを願い、厳冬のソウルの町に別れを告げました。

VII. 科学賞の受賞

JADR会員が科学賞を受賞されたという大変慶ばしいニュースを2件お届けします。

JADRの理事である中林宣男教授（医歯大・医用器材研・有機材料部門）が本年度のHollenback Memorial Prizeを受賞されました。この賞は、歯科診療と歯科材料の進歩発展と教育啓蒙に功労のあったHollenback博士を偲んで1975年に設定されました。毎年、歯科用高速切削器具の発明、歯科材料の規格制定や教育啓蒙、新しい歯科材料の開発、更に歯冠修復診療の教育向上などに貢献された方が受賞対象になっております。中林教授の樹脂含浸層（Hybrid Layer）の発見と、それをベースにした象牙質接着機構の解明、それに基づく歯科材料の開発の御業績が今回の受賞の対象となったものと思われま

す。（接着歯学、15巻2号1997より一部変更して転載）

また、JADR評議員である日本大学歯学部病理学教室の茂呂周教授が、本年5月12日、チェコのプラハにおいてチェコ科学アカデミー・1997年度のメンデル賞を授与されました。メンデル賞は遺伝学上で偉業を成したグレコール・ヨセフ・メンデルの名にちなみ1965年に創設され、1988年からはチェコ科学アカデミーが受け継いでいる権威ある賞で、免疫学・遺伝学・および分子生物学の分野で卓越した研究成果を挙げたものに対して授与されます。歴代の受賞者にはガルベッコ、ビッショッフといったノーベル賞受賞者が名を連ね、日本人としては赤井弘氏に次ぎ、2人目の受賞となりました。（日本歯科新聞、第1056号より一部変更して転載）

VIII. Sixth International Conference on the Chemistry and Biology of Mineralized Tissues

Sixth International Conference on the Chemistry and Biology of Mineralized Tissuesが下記の通り開催されます。詳しい資料をご希望の方は大会事務局までご請求下さい。

学 会 名 : Sixth International Conference on the
Chemistry and Biology of Mineralized Tissues
場 所 : Club Méditerranée, Vittel, France
期 間 : November 1-6, 1998
大会会長 : Michel Goldberg & Colin Robinson
大会事務局 : Dr. M. Goldberg
Faculté de Chirurgie Dentaire,
Paris V 1 rue Maurice Arnoux 92120
Montrouge, France
E-mail: michel.goldberg@hol.fr

IX. 事務局だより

JADR 事務局長 岡田 宏

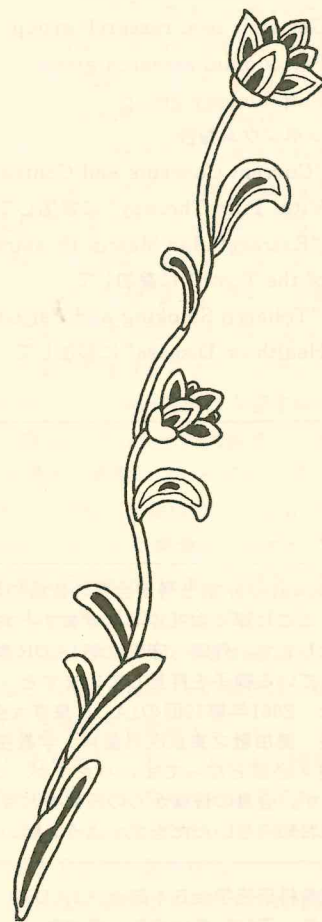
- 1) IADR内には数多くのResearch groupが存在し、横断的な歯科研究会議の中にあつて、各groupが中心となり、それぞれの研究テーマにより即した形態での学会活動も行われていることは会員の先生方もご承知のことと存じ上げます。これらのResearch groupのいずれにも加入されていない先生方がおられましたらこの機会にぜひご検討下さい。また、これまでにGroupへの加入の意思表示をすでになさっている先生方におきましても、Group会費未支払いのためactive memberとして扱われず、past interest, potential interest, unspecified interestという分類で扱われてしまっているケースがあることが判明しました。Group会費はIADRの年会費納入時に同時に支払っていただくことになっておりますので本部の請求もれがその原因のようですので、今回のIADR会費請求時にはご留意下さい。
- 2) Orlandでの評議会報告で確認され、IADRの会則にも明記されておりますように“IADR会員はDivisionに所属し、その年会費を納入しなければならない。”ことになっております。IADRに新たに入会を希望する先生が周囲におられましたら、まずJADRに所属していただきますようお願いいたします。

3) JADR事務局では長期間会費を滞納され、事務局からの勧告に応じていただけなかった先生方および連絡先が不明となってしまった先生方に対して、やむなく除名処置をとらせていただいております。JADRが除名となりました場合には同時にIADRも除名処理されますのでご留意下さい。退会を希望される先生方または連絡先を変更される先生方は事務運営の効率化のため必ず事務局までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

X. 評議員名簿 (1997年～1998年)

(敬称略)

北海道医療大学歯学部歯科理工学講座	大野 弘機
北海道大学歯学部生化学教室	久保木芳徳
岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座	石橋 寛二
東北大学歯学部高齢者歯科学講座	渡辺 誠
奥羽大学歯学部口腔生化学講座	堀内 登
山形大学医学部歯科口腔外科学講座	柴田 考典
明海大学歯学部口腔生理学講座	上羽 隆夫
日本大学松戸歯学部生化学講座	安孫子宜光
東京医科歯科大学歯学部歯科薬理学講座	大谷 啓一
東京歯科大学口腔超微構造学講座	柳澤 孝彰
日本歯科大学歯学部衛生学講座	丹羽 源男
日本大学歯学部病理学講座	茂呂 周
昭和大学歯学部歯科薬理学教室	山田 庄司
神奈川歯科大学口腔細菌学教室	梅本 俊夫
鶴見大学歯学部薬理学教室	千葉 元承
新潟大学歯学部歯科保存学第一講座	岩久 正明
日本歯科大学新潟歯学部歯科理工学教室	小倉 英夫
国立感染症研究所口腔科学部歯周病室	西原 達次
松本歯科大学口腔生化学講座	原田 實
朝日大学歯学部総合歯科学講座	山本 宏治
愛知学院大学歯学部病理学講座	亀山洋一郎
大阪歯科大学歯科矯正学講座	川本 達雄
大阪大学歯学部歯科矯正学講座	高田 健治
岡山大学歯学部予防歯科学講座	渡邊 達夫
広島大学歯学部歯科補綴学第二講座	浜田 泰三
徳島大学歯学部歯科理工学講座	浅岡 憲三
九州歯科大学歯科理工学講座	小園 凱夫
九州大学歯学部小児歯科学教室	中田 稔
福岡歯科大学口腔生化学講座	阿部 公生
長崎大学歯学部歯科保存学第二講座	加藤 伊八
鹿児島大学歯学部予防歯科学教室	井上 昌一



CONTENTS

I. '97 Newsletter 第2報によせて	1	E. 第75回 IADRに参加して	
II. 第45回 JADR 総会・学術大会のご案内	2	1. 唾液由来 Secretory Leukocyte Protease Inhibitor について	12
III. JADR 理事会報告	3	2. 口腔細菌学関連の演題について(1)	13
IV. 第79回 IADR 総会組織委員会の発足	3	3. 口腔細菌学関連の演題について(2)	13
V. 第75回 IADR in Orlando の報告		4. 口腔腫瘍関連の演題について	13
A. IADR 評議会の報告	4	5. "Specific Immunology" のセッションに参加して	14
B. IADR Strategic Plan について	5	6. 歯内療法学のセッションに参加して	14
C. 各 Research Group の活動報告		7. Craniofacial biology 関連の演題について	14
1. Behavioral sciences/Health services research group	8	F. Hatton Award Competition に参加して	15
2. Craniofacial group	8	G. William J. Gies Distinguished Scientist Lecture に参加して	16
3. Dental materials group	8	H. サンスターチャペルヒルシンポジウム'97に参加して	16
4. Geriatric oral research group	9	VI. IADR 韓国部会に参加して	18
5. Periodontal research group	9	VII. 科学賞の受賞	20
6. Pulp biology group	10	VIII. Sixth International Conference on the Chemistry and Biology of Mineralized Tissues	20
D. シンポジウム報告		IX. 事務局だより	20
1. "Current Concepts and Controversies in Vital Pulp Therapy" に参加して	11	X. 評議員名簿	21
2. "Extracellular Matrix Proteins (ECM) of the Tooth" に参加して	11		
3. "Tobacco Smoking and Periodontal Health or Disease" に参加して	12		

●編集後記●

本年度の Newsletter 第2号が会員の皆様のお手元に届く頃は猛暑の厳しい頃かと思えます。今回も貴重な原稿を沢山頂戴できましたこと、ここに厚くお礼申し上げますと共に、ご無礼なお願いの数々、この Newsletter の発行をもってご容赦下さいますようお願いいたします。作田 守先生が IADR 次期会長に就任され、IADR committee member にも JADR から多くの先生方がご活躍になっている様子を拝見していると、改めて IADR に占める JADR の役割と期待が大きくなってきていることが実感されます。また、2001年第79回の IADR 東京大会の開催に向け本年度から IADR の Local Organizing Committee として組織委員会（委員長：黒田敬之東京医科歯科大学教授）が発足することとなりました。JADR に対する会員の先生方の絶大なご支援とご協力が益々必須となってまいりますが、この Newsletter が会員の先生方の自由な情報交換・意見交換の場になればと切に願っております。会員の皆様からの投稿をお待ちいたしておりますと共に、編集に関するご意見ご要望等がございましたら何なりと事務局までお知らせいただきますようお願い申し上げます（岡田 宏 FAX : 06-879-2934）。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

連絡先：〒565 豊中市新千里東町1-4-2 千里ライフサイエンスセンタービル14階 学会センター関西 内

FAX 06-873-2300 担当：大戸 道子

JADR 事務局長 岡田 宏（大阪大学歯学部口腔治療学講座）

連絡先：〒565 吹田市山田丘1-8 FAX 06-879-2934

1997年8月8日 発行